
射撃部、部員募集中。

海鳥 笛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

射撃部、部員募集中。

【Nコード】

N4181X

【作者名】

海鳥 笛

【あらすじ】

ありそうでなかった、FPS系ノベル。

高校に入学し部活動に悩んでいた治が強制入部させられたのは、なんと射撃部だった。

個性的なメンバーに囲まれ、何をするのかと言えばもちろん、シューティングゲーム。

笑いあり、流血ありのバトルコメディ。

一 発目

じつとり汗で濡れた髪が、頬にへばりつく。深く抉られた壁から突き出すのは、古びた水道管。その表面にある、刃物で切り裂かれたかのような亀裂からは大量の水が噴き出し、崩れかけたトイレの仕切りを伝っている。

『そのまま直進しろ。しくじるなよ』

インカムから指令が入り、植村治は我に返った。ゆつくりとあたりを見回し、改めて自分の置かれた状況を確認する。だらんと下げられた右手が持つ、鉄の塊。トリガーに当てられているその指が、小刻みに震えている。

「しくじるなよ」、か。やってやろうじゃないか」

自分に言い聞かせるように言うと、胸の高さで銃を構えた。足音を消し、一步一步踏みしめるようにして瓦礫の中を進む。ところどころ穴の開いた天井から差し込む太陽の光が、生きていることを証明する唯一の手段のように思える。

タイルの一枚がはがれ落ち、静寂には大きすぎる音をたてた。心臓は今にも爆発しそうだったが、崩れたタイルを注意深く観察すると、鼠が一匹這い出してきた。

「異常なし。これより作戦行動に移る」

ホッとしたように言うと、治は通信を切った。額の汗を拭い、さらに奥へと足を踏み入れる。

崩れかけたトイレは、広々とした格納庫へと繋がっていた。戦闘機、ミサイル、装甲車といった兵器が所狭しと並んでいる。何に使うのか分からない道具の数々が棚に陳列され、格納庫内はまるで迷路のようになっていた。

遠くに、半開きのシャッターが見える。棚に身を隠しつつ顔をのぞかせると、二、三人の人影が、こちらに近づいてくるのが見えた。治は舐めるように、腰から下げられたC4爆弾に指を這わせる。

その瞬間、格納庫内に一発の銃声が轟いた。治は体を折り曲げ、物陰に身を隠す。気づかれたかもしれない。残響が消えるのを待ち、インカムに向かって応答を要請する。

「……………」

ノイズ混じりの沈黙が数秒続いた後、ぶつんと音を立てて通信は途絶えた。治はインカムを耳から取り出すと、いらだちをぶつけるようにして投げた。数回地面をはねた後、インカムは側溝へと吸い込まれた。甲高い金属音が響き、広い空間がその音を増幅させる。まづい。

そう思ったの束の間、シャッターの方向から敵の足音が近づいてきた。全神経を集中させ敵からの死角を探すが、唯一の逃げ道であるトイレへの入り口はここから十メートルも離れている。そこまでたどり着くには、先ほど通った何もない空間を通らなければならぬ。

終わった。治は負けを確信した。

真上に五発、発砲する。ざわざわと物音がし、敵が混乱しているのがわかった。かぶっていたヘルメットを脱ぎ、適当な方向にほうり投げた。治は天井を仰ぐと、つい数時間前の、自分の行動を回想しようとした。それはいささか灰色すぎる、ロマンティックの欠片もない天井だった。

治が私立南川高校に入学してから、早くも一週間が経とうとしていた。

その日の授業が全て終わっても、学校の下駄箱から校門までを繋ぐ道、通称「大通り」は、いつにもまして賑やかな声に包まれていた。

各部が自由に屋台を出店し、入部を誘う、「勧誘祭」。それも今日は最終日らしい。大通りの賑わいは相当なものになっており、治の不快感をさらに増幅させる。

二階の窓からそれを一瞥すると、治は手中のプリントへと目を落

とした。

入部届。

プリントには、太字のフォントで大きくそう書かれていた。

「はあ」

治はそれを見て、喟然と大息して思い出した。あれはちょうど三年前の、今くらしいの時期のことだった。

中学に入学したばかりの治は、入部届をもらった当日に、それを破り捨てた。もちろん理由は自分の時間を奪われるのが嫌だったからで、当然友人たちもそうするものだと思っていた。が、現実は違った。それぞれ思い思いの部活へと入部した友人たちは、初めのうちこそ治と同じく「部活なんてしないほうがいい」などと言っていたが、時が経つにつれ部活連中と意気投合していつてしまった。当然、そうなると治はひとりぼっちになつてしまった。

中学三年生の夏、最後の大会を迎え涙する友人たちを遠巻きから眺め涙した治は、その屈辱を、今見返そうとしているのだった。

治は下駄箱へと向かうと、緊張で汗ばむ足の裏を自分の靴へと押し込んだ。上履きを自分のロッカーへとしまうその面持ちは、今から戦へ赴こうとする武士のそれに等しい。昇降口のガラス一枚を隔てたむこうがわは、まさに戦地と呼ぶべき喧騒に包まれている。

ごくり。生唾を飲み込む音が、がらんとした下駄箱にこだました。当然だ。みんな、むこうがわにいたのだから。

意を決した治は、重い足取りで扉の前まで進むと、もう一度唾を飲み込み、扉を開け放った。

「いらつしやいませ！ 野球部名物たこ焼き、おいしいよ！」

「バレー部特製クッキー！ お代はいりません。そのかわり、入部お願いします！」

「パソコン部オリジナル『むふふな小冊子』。一部五百円になります」

さっきまではむこうがわに響いていた音が、直接治の耳へと入り込んでくる。そんな光景に立ちくらみを覚えた治は、近くにあった

屋台へと手をついてしまった。

突如として、その右手が誰かに握られた。

「君、入部希望者！？ 私ね、茶道部の部長をやってるの！ ねえ、なんて名前」

「え、あ、ごめんなさい」

手を握りブンブンと上下に振り回していたその腕を振り払い、治は喧騒の中へと逃げ込んだ。

だめなんだ、昔から。人と会話するのが。

そんなことを考えながら、治は人混みの中をとぼとぼと歩いていった。しかし、すぐに頭を振る。

中学時代を繰り返さないと決めたんじゃないのか。

治は自分に言い聞かせると、入部届を握りしめ、一步を踏み出した。

五分後。

「帰ろう」

校門を出てすぐの歩道に、治は立ち尽くしていた。

入部届を持った治に声をかけてきたのは、結局サッカー部のみだった。最初は興味をひかれたものの、話を聞くうちに、人嫌いな治にはチームスポーツなど到底不可能なことに気づいたのだ。そしてそれからの間、熱心にサッカーへの思いを語る先輩にひたすら愛想笑いを続け、今に至る。

深く手を突っ込んだポケットの中で、紙の破れる音がした。

治は、止まったままの足に向け繰り返し返した。

部活なんてものは、自分には向いていないのだ。ああいうものもっと愉快的な人間がやることなんだ。

すでに破れているポケットの中の紙を、さらに細かくちぎりながら、ぶつぶつと文句を言う。

「部長、あの人ちようどいいですよ！」

「よし、任せろ」

そんな声が背後から聞こえたあと、治の視界は暗転した。

顔面にかかる、布の感触。暴れようかと思っただが、両腕はいつのまにか縄のようなもので縛られている。布の上から口が押さえられていて苦しいので、「んんーっ」と声にならない叫び声を上げてみただが、効果なし。

徐々に周りの音が聞こえなくなってきた。先ほどから一定のリズムで体が揺れていることから、どこかに運ばれているのだろうとは思っただが。

そろそろ縛られていない足を使って暴拳に出ようかと思案していると、治の体は床に叩きつけられた。懐かしい地面の感覚を楽しむまもなく、治の顔にかぶされていた布が取り払われる。

目の前には、いち、に、さん、四人の女の人。

「なんですか？」

勇気を持って疑問を口に出してみるも、返事がない。半分分かっていたとはいえ、傷つく治。

その中の一人が、短めの髪に小さい体格をした女の子が、治のもとへ駆け寄りテキパキと両手を縛っていた縄をほどいた。

無意識のうちに拳をグーパーしながら呆然としてみると、髪の高い女性が、静かに言った。

「さ、みんな席についてくれ。君はそこだ」

治が「君」の指す人物がはたして自分を意味しているのかどうかを考えているうちに、他の全員は席に座ってしまった。床の上で果然と座り込んでいる治には、問答無用の視線が降り注いでいる。やがて観念したのか、治はしぶしぶ空いている椅子へと座った。

部屋には椅子と机が五ずつ置かれていた。治の右隣には、不機嫌そうな顔をした少女が座っている。少し癖のあるカールが目立つ長めの髪は、綺麗な赤毛をしている。不機嫌そうに先ほどから見つめているのは、目の前に置かれたパソコンのディスプレイだ。何か話しかけようかと思っただが、あまりに不機嫌オーラが強いためあえなく断念する。

左手には、先ほど「座れ」と号令をかけた長い黒髪の女性がこち

らを向く形で座っているが、同じくパソコンの画面を見て何やら操作をしている。

そして向かいに設置された二つの椅子と机にもそれぞれ誰か座っていて、一人はさつき縄をほどいた女の子。もう一人は、

「50メートル先にカモ発見。うへ、うへへ」

ジャンキーのようなことを口ずさんでいる、物騒な女の子がいた。モンブランを思い浮かばせるような茶色がかった頭髪は、それほど長くないにしても、肩にかかり独特の雰囲気醸し出している。そして何より目立つのは、その端正な顔立ちだ。どこかで見た覚えのある顔だと思つたが、これほどまで印象に残る人に会っているのなら忘れるはずがない、と治は結論付けて考えるのを止めた。

治は現状を飲み込めないまま、治は自分の前にあるディスプレイを見つめた。

英語で書かれたロゴが画面上部に無遠慮な図々しさで表示されていて、中央にはがたいのいいおっさんが銃を持ってこちらを挑発するようなポーズを繰り返している。

「《サバイバル・シューティング》？ なんですか、これ」

「君、ゲームをやったことは？」

黒髪の女性が、だるそうに答えた。

「そりゃあ、人並みにはやりますけど」

「一人称視点シューティングゲームよ。FPS。男ならやったことくらいあるでしょ？」

隣に座っている、不機嫌そうな少女が言った。FPS？ 聞き慣れない単語に首を傾げる治。

まさかここまで人を連れてきて、ゲームをさせようってことなのか？ 冗談じゃない。

治は、文句を言うべく立ち上がった。

「僕、」

「対戦相手が決まりました。準備をお願いします」

視線を三十度下に傾けると、声の主と目が合った。女性的な可愛

げのあるショートカットに、高すぎず、低すぎない鼻立ち。そしてその左右に鎮座しているのは、深淵を思わせるかのような黒々とした瞳。まるで神話の怪物に睨まれているかのような言いようのない恐怖を感じる、そんな目をしている。

(殺すぞ)

治の耳には、確かにそう聞こえた。いや、彼女の口は一ミリも動いていなかった。

全身に悪寒を感じ、治は硬直した。手も、足も、首も、蛇に睨まれた蛙のように微塵も動かせない。そこにあるのは、恐怖そのもの。だからこそ、治は自らの肩に置かれた手のひらに、心臓が飛び上がるほど驚いた。

「だ、そうだ。さあ、遠慮せず座って」

いつのまにか立ち上がっていた黒髪の女性に笑顔でそう言われ、治はその言葉に従った。

「私は石原茜。あんた、名前は？」

隣に座る少女、茜は、こちらを見ずに言った。「植村治」と言うと、突然こちらにむき直し、それだけでなく椅子を密着させ、目の前にあるキーボードを叩き始めた。しかし彼女は治の体に触れることを何とも思っていない様子で、淡々とキーをタイプする。

「え、ちょ、何し」

「今からハンドルネームを設定するから。適当でいいわよね」

ゼロ距離の位置にある茜の体から漂ういい香りに大混乱中の治を尻目に、いたって冷静に茜が言った。

茜がENTERキーを叩くと同時に、画面に新しい文字が表示された。

《ゲームにようこそ》の文字の後に、赤字で《人間失格》と書かれている。

「人間失格って……まさか僕のこと？」

「そ、名前が『治』だからちょうどいいと思って」

あらぬ方向に偏った彼女の知識とユーモアのセンスに治が言葉を

失っていると、それを見かねてか黒髪の女性が口を開いた。

「そうか、自己紹介がまだだったな。お前の目の前にいるのが、本庄綾。お前と同じ一年生だ。ちなみにスナイパーな」

「は？」

人を紹介する時に聞き慣れない文句が混じっていた気がして、治は口を挟んだ。

しかし、何も触れられることなく自己紹介は続けられる。

「その横が夏目吹雪。学年は二年。お前も聞いたことあるだろ？」

夏目財閥。その娘さんだよ」

どこかで見たとあると思つたら、夏目財閥の娘、本物のお嬢様じゃないか。治は、自分の住んでいるマンションのすぐ近くにそびえ立っているビルを思い浮かべながら、こくりと肯定した。まさかこんなところであるビルの持ち主に会うことになるとは予想もしていなかったが、ビルの持ち主がこんなにも変人だということも予想していなかった。その後には添えられた「ライフルマン」という単語は、聞かなかったことにしておく。

「そして、お前の隣にいるのが石原茜。吹雪と同じ二年生で、兵科はポイントマンだ」

治が紹介とともに隣を見ると、茜は一心不乱にキーボードを叩いている最中だった。大丈夫か、ポイントマン。何のことが分からないけど。

「最後に、わたくし、部長であり司令塔の、長谷川翠。よろしく」
最後に黒髪の女性が自己紹介をした。長谷川、という名字もどこかで聞いた覚えがある。しかしそれよりも、「部長」という単語が治には気になった。

「部長ってことは、なにかの部活なんですか？」と治が質問しかけたとき、茜が業を煮やしたように叫んだ。

「あの！ 相手さつきから待ってるんですけど。そろそろ言い訳が苦しいんですけど！」

治が声の方向を見ると、相変わらず茜がキーボードをカチャカチ

ヤやっている。

「おっと、すまない治くん。説明は後にしよう。とりあえず席に座ってくれるか」

慌ただしい雰囲気にも飲まれ、治はやむを得ず腰を下ろした。

「それでは本日、初の五対五の試合を始める。治くんは初戦なので、各自バックアップを怠らないように。以上」

翠が言い終えると同時に、画面が切り替わり、緑色のバーが表示された。

おそらくロード状況を示しているのだろう、と治は思った。案の定バーが満タンになると、治は見慣れないゲーム画面に首を傾げた。画面上に表示されているのは、マップや体力を別にする、銃のみ。それも右下に半分だけで、自分の体に至ってはグリップを握る手がかすかに映り込んでいるだけだ。

しかし治が質問を口にする暇もなく、陽気な外人が《ミツシヨン・スタート》の宣言をする。

その瞬間、空気が変わった。

ピリピリした、などというなまぬるいものではない。今や教室に漂っているのは、戦争特有のキナ臭さだけだ。

沈黙。

つい数秒前とは打って変わって、まるで今にも開演するコンサートを待っているような、独特の緊張を含んだ静けさが支配する空間。その沈黙を破ったのは、以外にもお嬢様、夏目吹雪だった。

「トイレ、フラグレ二つ。二人以上」

治が聞き取れたのは、それだけだった。

「テロからグレ放るから声確認して」

「了解……聞こえないわ」

「吹雪、トイレ取り返せる？」

「無理ね、たぶんトイレにスナイパー」

短い単語が飛び交う中、治は一人、移動するにはどうしたものかとキーボードを端から押している最中だった。女子数人が「トイレ

トイレ」と連呼する異様な状況の中、治に基本動作を教える人間は誰もいない。

「ちよつと、裏取られてるじゃない！ 中央は……治なにやってんの！」

ヒステリックな叫び声がすぐ隣であがり、治は顔を上げた。見ると、茜が、それはもうすごい剣幕でこちらをにらみつけている。

「あんた、リスポンで芋るなんていい度胸してるじゃない。いいわ、そっちがそのつもりなら私にも考えがあるわ」

「まあまあ。治くん、移動はWASDキーでできるから」

治の画面をのぞき込むやいなや、自らの鞆に手を突っ込みゴソゴソやりだした茜を制止して、翠が言った。

言われた通り治がキーを押すと、開始から今まで棒立ちだったキヤクターが、右へ左へと華麗なステップで移動を始めた。しかし、

《Time's up》

陽気なシステム音が作戦終了を宣告したのも、それと同時だった。茜は見るも無惨な表情で、「だから初心者はイヤなのよ」と文句を言い始める。

僥倖だと治は思った。

今だけはあの鼻につくシステム音も、天使のラッパに聞こえなくもない。いや、そうに違いない。

「それじゃ、僕帰ります。時間切れみたいなんで」

そう言いながら鞆を掴みかけた時、治は後方で無慈悲な音声が行くのを聞いた。

《The next round》

治が振り向くと、そこには笑顔の翠が立っていた。手には引き抜かれたヘッドフォンを持っており、それを再びパソコンに繋ぐと、そのままきびすを返した。

「座って」

この場所に逃げ道などないことを、治はようやく悟ったのだった。椅子に戻った治は、これからどうしたものかと考えた。先ほどと

同じようにプレイしたとしても、また隣の茜に怒号を吐かれる自信しかない。まず、ゲームをするにはルールを理解することが必要だ。操作方法も分からない初心者に注文をつけるのは、はなから無理な話。そう思った治は、素直に質問をすることにした。

「あの、このゲームはどうすればいいんですか？」

「敵を撃つ。それだけ」と翠。

「直感よ。あと視線は常に画面全体を見ること」と茜。

「前を見る」と眠そうに答えたのは綾。

「自分で調べなさい」と言ったのは吹雪だ。もはやこれはアドバイスでも何でもないと思っただが、ここで横やりを入れても話がそれるだけなので無視をする。しかし、他の意見にしても「直感」だとか「撃て」だなど、初心者に対してのアドバイスではない。もっとうとう……と治は何かを言おうとしたが、適当な言葉が見つからない。

「とりあえず、練習をさせてください。試合なんて僕には無理です」
治がやっと口に出したのは、そんな言葉だった。

「まず移動する時は照準も動かして……違う。マウスを持つのに」

結局、相手チームに詫びの言葉を述べ試合を中断した治たちは、

「練習部屋」と称したところで練習をすることになったのだが。

「バカ、なんで一歩進むたびに空を向くのよ。前を見るの、前を」

まるで猿に芸を仕込む飼育員のような、と治は思った。

「席が隣だから」という理由で飼育を任された茜は、ときどきキーキー叫びながらも、治にゲームの趣旨をなんとか伝えようとしていた。その苦勞とは裏腹に、練習を始めてから十五分で治が覚えたのは、メンバーのハンドルネームだけだった。

治《人間失格》の目の前で、説明に合わせながらぴよんぴよんと飛び跳ねている《黒猫》が茜。別に頭に異常をきたしているわけではなく、治にジャンプの方法を教えている最中なのだ。

少し向こうに見える高台で、定期的に轟音をたてている《消しゴ

ムのような君》が綾。

その横で空に向かって手榴弾を放り続けている《メキシカン》が吹雪。

そして、延々と支援要請と叫んでいる（ラジオチャットというらしい）のが、翠、《翠空鎌治》だ。

各々個性溢れるネーミングのおかげで名前はすぐに覚えられたが、治には一体なんと呼びかけていいのか分からなかった。「おいメキシカン。消しゴムを助けてやってくれ」と？

治が操作方法と頻繁に使うキーを教わったところで、メキシカンが時計を見て悲鳴を上げた。時刻は七時を二十分ほど過ぎたところだ。

もうそんな時間なのか、と治は思った。

嫌々ながら付き合っていたはずが、どこか楽しんでいる自分がいたことに、治はようやく気づいたのだ。

若干名残惜しく思いながら、治はパソコンの電源を切った。

画面の前で立ち尽くしている治に向かって、翠が「鍵閉めるぞー」と声をかけた。見ると、もう部屋の電気は消されていて、茜たちはもう廊下でワイワイと騒いでいる。

こんな部活なら楽しめたのかも、と治はポケットに触れた。そこには破られた入部届が入っていて、それはもう全てが手遅れだということの意味している。

そんな気持ち振り払い、治が部屋から出ると、待ってましたと言わんばかりに全員がこちらを向いた。

「明日は撃ち方について説明するからね。サボるんじゃないわよ」と茜が言った。

「当然よ。今日の失敗を繰り返してもらっては私が困るわ。信じられる？ 練習とはいえこの人私の頭を撃つたのよ」と吹雪が野次を飛ばす。

「……………これ」と綾に手渡されたのは、『突撃！ FPS』と書かれた雑誌。

肩に手を置かれ、治は振り向いた。

「入部届はこっちで書いておくから。じゃ、よろしく」

新品の入部届を持ってひらひらさせながら言った翠に、治は黙ってうなずいた。

二 発目

次の日、治は授業を終えると、あの教室の前で立ち尽くしていた。改めて外からその様子を見ると、不自然な点がいくつもあることに気づいた。

あたりの廊下には、銃を持ったおっさんの描かれたポスターがいくつも貼つてある。治はその中の一枚に近づき、書かれている内容を読んでみた。

『射撃部、部員募集中！ 初心者でも丁寧に教えます。銃が好きな人、人を撃つのが楽しい人は、特に大歓迎！』

「初心者でも丁寧に、ねえ……」

治は昨日の出来事を思い返しながら呟いた。

移動手段が分からなくて立ち尽くしている初心者に向かってボロクソに罵倒するのは、果たして「丁寧に教える」の中に含まれるのだろうか。

「お、早速来たな、《人間失格》くん」

そういえばそんな名前をつけられたんだっけ、と思いながら治が振り向くと、そこには案の定、翠の姿があった。

「長谷川先輩の声、分かりやすいですね。ハスキーというか」

「心外だな。可愛いといってくれるか。それと、名前で呼んでくれるとなおよし」

「褒めたんですよ、翠先輩」

短い会話をした後、翠は部室の鍵を開けた。翠の後を追うようにして、治も部室へと入る。

「へえ、意外ですね。この部屋に本棚があるなんて」

治は入ってすぐ左手にある本棚に目をやり、驚きの声を漏らした。「そうか？ 本はいいぞ、ためになることばかりだ。というか昨日もあつただろ、本棚」

「昨日は慌ただしすぎて、部屋を見る余裕がなかったんですよ」

治は本棚に近づき、陳列されている本の背表紙に手を当てた。そこに書かれている文字を、黙読する。

『反射神経を鍛えるには』

『射撃に重要な、五つの要素』

『戦争の常識』

どれも似通ったなタイトルのものはかりで、治は、なるほど納得した。適当に選んだ一冊を手に取り読んでいると、勢いよくドアが開け放たれた。その音に若干気分を阻害され、治は顔を上げた。

「今日もぶっ殺すわよ。ノルマ二百人！」

意気揚々と犯罪予告をしながらやって来たのは、もちろん茜。しかしそれ以上に恐ろしく見えるのは、その後ろからしずしずと部屋に入ってきた綾だ。治は、昨日感じた悪寒を思い出し、ブルツと身震いをした。

それから五分ほど遅れて吹雪が合流すると、今日もいよいよ、戦が始まるのだった。

「いい？ 基本は腰だめで、リズムよくトリガーを引くの。見ててダンダンダン、と一定のリズムで射撃をしているのは、《黒猫》こと茜。見よう見まねで治も挑戦するが、うまくいかずに反動で空を向いてしまう。

「本当にヘタクソね。ちょっと、動かないで」

茜はそう言っただけで立ち上がると、治の後ろに移動した。

当然、「キャラクターを動かすな」と言われたものだと思っている治は、小憩だと思いマウスから手を離そうとする、が。

「バカ、動くなって言ってるでしょ」

茜にそれを止められると、マウスを持つ治の手の甲に、別の手がかぶせられた。しかし、それは治の左手ではない。突然の出来事に口をパクパクさせている治には目もくれず、その耳元で茜は解説を続ける。

「まずはリズムよく、こう、トントントント」と

治の人差し指が、意思とは関係なく運動するたびに、脳を電撃が伝う。なんですかこれは。まさかサービス料を取る気じゃないでしょうね。

「うまいじゃないの。次は移動しながら……」

そう言いながら茜が次に手を伸ばしたのは、治の左手が乗っているキーボード。完全に後ろから抱きつかれるような格好になりながら、治はなんとか緊張を悟られまいとして平然を装う。

カチャカチャ。ドクンドクン。

もはや治の耳には、茜の声は届いていない。顔を真っ赤にしながらクリツクをし続けるその姿は、まるで一種の人体実験を彷彿とさせる。

しかし、夢はいつかは覚めるもの。

視界の隅にチラチラと移る二人の姿を見て、我慢しきれなくなつたのか翠が口を開いた。

「お前ら、ここはラブホテルじゃないぞ」

最初は、何を言ってるのか分からない、といった表情をしていた茜も、やがて治と同じく顔を真っ赤にし、叫んだ。

「翠先輩が教えるって言ったんじゃないですか！」

「いや、私はそこまでしろとは言っていない」

口論が始まり、自由になつた治は机に突っ伏した。未だ興奮冷めやらぬ心臓が、ドクンドクンと独りでに高鳴っている。

ぴこん、と音が鳴り、画面に文字が表示された。

『お疲れ様』

見ると、《消しゴムのような君》からのチャットのようだ。

『ありがとう。君は喋らないの？』

モニターを二つ挟んだ向こう側にいる綾を見ながら、治は返信をした。

『チャットのほうが楽なの。変かな？』

『いや、僕もそう思う』

実際に治も、かなりのあがり症だ。小学生の頃の学芸会では、朗

読の舞台に立ち観客見た途端に、そのまま気絶してしまった、という伝説を持つほどに。それを書く、返信を打つ彼女の表情は、ずいぶんと明るいものに変わった。

『私達、気が合うかもね』

『そうだと嬉しいけどね』

治も文字でのコミュニケーションなら、落ち着いて返事をする事ができた。

ぴこん、と再び音がして、赤く着色された文字が表示された。

『お前ら、ここはキャバクラじゃないぞ』

いつのまにか口論を終えていた翠が、不機嫌そうにこちらを睨んでいた。

「きよ、今日は何をするんですか？ 射撃練習は終わりましたけど、さすがにまだ実践は早いかなあ、と」

治は早口で言うと、ジト、とこちらに向けられた視線から目をそらした。

「昨日のあれは様子見を兼ねての試合だ。まずは、そうだな」

顎に手を当てしばし考えた後、翠は続けた。

「野良でプレイしている私達を観察してもらおうか」

「はい」

野良とは、不特定多数の人々が集うフリーのサーバーで、ランダムにマッチングされたメンバーで試合を行うことだ。完全に他人と組む確率が高いため、昨日の試合のごとく連携は不可能。しかし、チーム戦力に差が生まれなかったため、バランスの取れた高レベルの戦いができることも少なくない。

「お、珍しいな。三人同じチームか」

青チームには、《黒猫》《翠空鎌治》《メキシカン》の三人が揃っている。対する赤チームには、《消しゴムのような君》が早くもスタンバイしている。

三人のいる青チームは、目標地点に爆弾を設置し破壊するか、もしくは相手チーム全滅させれば勝利となる、テロリスト通称。

そして綾のいる赤チームは、設置された爆弾を解除するか、同じ相手チームの全滅で勝利となる、《カウンターテロリスト》。

対戦マップは、昨日と同じほうが分かりやすい、ということ、《ブラック・ウォシユレット》が選ばれた。

茜に手伝ってもらい、治が観戦モードに移行すると、それと同時にゲームが始まった。

「BWの基本はね、名前の通りトイレの確保がキーなの」と茜が言った。

「その通り。でも、まずテロリスト側は相手チームより先にたどり着くことはできないから、突入前にフラグレを投げる必要が……まあ、見ていれば分かる」と翠が続けざまに言う。

フラグレとかBWとか、略称が好きな人達だな、と治は思った。

「倉庫内で足音。おそらく位置的に、スナイパーだと思うわ」と吹雪が言った。早くも戦闘地帯にたどり着いた吹雪は、物陰にしゃがみ、じっと息を潜めている状態だ。

「吹雪はな、聴力とそこから得られる情報の思考がずば抜けている。よく見ておけよ」

翠に言われ吹雪のほうを見ると、彼女は画面ではなく、その横の虚空を見つめ、何かをぶつぶつと何かを呟いている最中だった。

「あれ、病院に行ったほうがいいんじゃないですか」と思わず治が本音を漏らす。

まずい、と治は思ったが、「ハハハ」と翠が笑っただけで、部屋は沈黙に包まれた。治は、ホッと胸をなで下ろした。

手持ちぶさたになつたので、治はなるべく音を立てないようにして立ち上がり、綾の後ろへと移動した。

別に音を立ててはいけなわけではなかったが、ここにいる自分以外の人物が、リアルタイムで戦場で獲物を待っていると考えると、どうしても慎重な動きになってしまったのだ。

綾の画面を見ると、そこには画面全体の半分以上を占拠するようにマップが表示されていた。味方の位置を示す白い点がちよこまか

と動き回ったり、また一定の場所で止まっていたりする。

治は少しためらったが、同学年いうこともあり、遠慮気味に話しかけることにした。

「えっと、《消しゴム》さん。何してるの？」

しばらく間が空いて、治が返事をあきらめかけた時、小さな声が発せられた。

「……の」

「え？」

反射的に聞き返してしまい、治はひどく後悔した。思えば、綾の声を聞くのは初めてだったかもしれない。

「綾、何してるのか言ってやれよ。治が、お前の戦術に興味があるってさ」

翠が「戦術」という言葉を口にした時、綾の目が、明らかに変わった。

「残りタイムは約一分半。おそらく敵のライフルマンは、スナイパーの位置を逆算してこの大通りを通るでしょう」綾はマップに表示されている中で一番広い通りを指さし、続けた。「しかし、私はそのタイミングでスモークを炊くことにより、大通りは使用不可に必然的にトイレを抜け倉庫に行くしかなくなつた敵兵を狙撃するために、私は一分を切るあたりには、この位置に移動する必要があります」最後に綾が指したのは、倉庫入り口から五十メートルほど離れた位置にある、車の影だ。

「言つとくけど、それスナイパーの戦術だからね。ライフルマンのあんたは、綾よりも吹雪を見習いなさい」

茜に言われ、治は隣合わせた二人の姿を交互に見た。

口を半分開け、目を見開いて何かを考え込んでいる様子の、吹雪。数秒ごとに味方の位置を確認し、戦況を頭の中に描いている、綾。「先生、僕は病院には行きたくないです……」

治は静かに、静かに言った。

「ちょっと、《人間失格》。あなたプレイ中に私のことをずいぶんと言ってくれたそうじゃない」

ゲームが終わると、プレイ中よりもいくらか多弁になった吹雪が、治に食って掛かってきた。もちろん原因は、治が放った数々の失言だ。

聞き慣れない名前に治は無視していると、その襟首を、思い切り引っ張られた。勢いよくひっくり返り、ちょうど床から見上げる形で吹雪の顔を見ると、どうやらかなりご立腹のようだ。

助けを求めるように翠に視線を送ると、何を勘違いしたのかウインクが返ってきた。

「部長もなんとか言ってくださいよ。この人、乙女の扱いを全く分かってないわ」

口を半開きにして、焦点の定まらない目で画面を見つめるのが乙女なら、僕だってかなりの美人になるはずだ、と治は脳内で反論した。

「治くんもわざと言ったわけじゃないさ。第一、吹雪がゲーム中に意識が飛ぶことだって、彼はまだ知らない」

「どうのことですか？」

治は思わず尋ねたが、返答はすぐには返ってこなかった。

翠が、綾、茜を順々に見てから、最後に吹雪へと視線を戻した。

「言っていいかな？」

「仕方がないですね、今回はかりは認めます」

「助かる」と翠が言うと、一呼吸置いて治に向き直った。「治くん、話がある」

「は、はい」

今までのやりとりを全て横から見えていた治だが、かしくまった口調に、妙に体を強張らせてしまう。

「ゲーム中の吹雪の姿は、お前も何度も見ているだろうから、その部分は割愛させてもらう」

「分かりました」と治は相づちを打つ。

「次はお前の知らない話だ。こう見えて吹雪は、なかなか男子に人気がある。ファンクラブも存在するほどで、人気の一つに「物静かな大和撫子」というものがあるそうだ」

「え？ でも……」

治は、昨日と今日、二日間の様子を思い返していた。吹雪はゲーム中、頻繁に口を開き、一番多く罵詈雑言を吐いていた気がする。

「そう。ここでの様子しか知らないお前には、意外に思えるだろうな」

翠は、その長い髪をかき上げ、ため息をついた。治はその意味が分からず、困惑の表情を浮かべている。

「ここで聞いたことは、他で話すなよ」

「……話しませんよ」

「吹雪には、殺人癖がある」

「……へ？」

思わぬ言葉に、治は頓狂な声を出してしまう。

「入部理由にそう言われた時、私も驚いてしまった。その殺人衝動をゲームで解消することによって、吹雪は欲望を満たしているというわけだ」

「ちよつと待ってください。仮にその話が本当だとしても、それと意識云々のくだりは、どういう関係があるんですか」

「うむ」と翠は自信満々で返事をする。「理屈は分らんが、おそらく興奮が限界を突破することによって、脳内麻薬が過剰分泌されるんじゃないかと、私は考えている」

「それで意識が飛ぶと？」

「ご名答」

馬鹿ですか。と治は言いかけたが、なんとか飲み込んだ。確かにゲーム中の吹雪の姿は、悪く言えば獣そのものだ。だからといって、そんなトンデモ科学を信じると言われても……。

「無理に信じるとは言わないさ。ま、私は面白いと思うけどね」

「そうですか」

治はなあなあに返事をする、マウスに手を伸ばした。

ぴこん、と例の音が鳴り、チャット欄に文字が表示された。しかしそれは、全体に見えるものではなく、治だけに見える個人チャットだ。

『ごめんなさい。気持ち悪いでしょ？ でもお願い。他の人には言わないで』

誰からのメッセージかは、その場違いにも程がある名前を確認する前には予想がついていた。

横目で吹雪の姿を確認すると、肩を落とし、返信を待っている。

何か気の利いたジョークでも書こうかと考えたが、いい案が思い浮かばないので普通に返事を書く。

『言いませんよ』

『本当に？ 私、あなたの言うことなんでも聞くから。絶対に約束ね』

一瞬、治の頭によからぬ企みが浮かんだが、すぐにそれをかき消す。そもそも治には、そんなことをする度胸は微塵もないのだが。

『なら、今度マップを教えてください。僕、まだ分からなくて』

しばしの間が訪れた。眼球を数ミリ右に動かせば吹雪の姿を確認できるが、今の治には、眼球どころか指一つ動かせない。

『ちよつと、何こいつ死なないんだけど』

隣で顔も知らない敵兵を罵る茜の音が、一キロ先から聞こえるかすかな雑音にしか聞こえない。

『トイレ』と綾の声。

『行ってらっしゃい』と翠が言った。

どうやら綾の向かった「トイレ」は、ームではなく現実のものらしい。

『ありがとう』

ようやく返ってきたのは、感謝の言葉。なぜ『ありがとう』なのかは分からなかったが、治が返せるのは、ただ一つ。

『どういたしまして』

小さく、吹雪が笑った気がした。しかし、それと重ねて隣の馬鹿が叫び声を上げたので、その真相はもう、確かめる術はない。

「ちよつと、今の見てた！？ 三人抜きよ、三人抜き！」

背中をバシバシ叩かれながら、隣の馬鹿に殺意を抱く治。キヤツキヤと喜びを全身で表現している茜は、治の背中を殴るのを一向にやめようとしなない。

「痛いです」

バシバシ。

「痛いですつてば」

バシバシバシバシ。

「三人抜き！ すごいですね、さすが《黒猫》様！」と治が悲痛の叫びを上げる。

「そうでしょ？ やっぱり私には、溢れんばかりの才能があるのね！」

やっと暴行を止め自分のモニタに向き直った茜を見て、不快感を隠そうともせず治はため息をついた。

「なかなか馴染んできたんじゃないか？」

一部始終を横から眺めていた翠が、頬杖をつきながら面白そうに言った。

「冗談じゃないですよ」

ハハハと笑って返されたきり、部室はしんと静まりかえった。

沈黙に耐えられない、という状態があるけれど、これはそういういた類いのものではない。まるで、何年も付き合いのある気の知れた友人と一緒にいるような、心地よい雰囲気学部室を漂っていた。

キーボードを叩く音と、舌打ち。それ以外は何も聞こえない。もしかしたら、自分が知らないだけで文化部はどこもこんな感じなのかもしれない、と一瞬思ったが、舌打ちの音がする吹奏楽部を想像して、治は一人嘔き出した。

『何がおかしいの？』は綾からのチャットだ。どうやら聞こえてい

たらしい。

「いや、僕はここ以外の部活をやったことがなくてね。他もここみたいなのかと想像したら、なんだか可笑しくて」

「私もこの部活が初めて」

「そうなの？ 中学では何もやってなかったんだ」

「……うん。変かな？」

意外なところで同胞に出会った治は、とたんに饒舌になった。

「変じゃないさ。僕からしたら、部活をやっている人間こそ変に見える」

返事が遅いので視線を横にずらすと、笑っていた。人はここまで上品に笑えるものなのか、と驚くほど綺麗に綾は笑っていた。それを見て、治も自然に微笑む。

「死ね、変態」

一瞬で血の気が引き、心臓が止まったかのように思えた。下顎がゆっくりと下がっていき、冷や汗が吹き出る。目元には涙が溜まり、あれ？ よく見ると、綾はまだ笑っている最中だ。

「ごめん、誤爆った」と舌を出して謝るのは、もちろん茜。

「死んで詫びてください」

本当に死ぬかと思った。ホツとして笑顔を作ろうとするが、目の下がひきつっている。

「いやあ、相手があまりにもマナーがなくなってさ。個人チャット送ろうと思ったら、こっちに誤爆したわ」

それにしても「死ね、変態」はないですよ、と突っ込む気力は、今の治にはない。「そうですね」と適当に流し、再びチャット欄に目を戻す。

「どうしたの？」

治のひきつった顔を見て心配したのか、綾が遠慮がちには聞いた。

「なんでもない」

「私は中学時代弓道部にいたぞ！ 変人とはひどいじゃないか」

新たな介入者に嘆息しながら、治は顔を上げた。

「何してるんですか」

「悪気はない。ただ邪魔しようと思って」

「悪気の塊じゃないですか」

しばらく豪快に笑っていた翠だったが、急に真顔になると、キーボードに何かを打ち始めた。

『それはさておき』と表示されたのは、翠からの個人チャット。

『何してるんですか』とふざけて返すが、『真面目な話だ』とたしなめられた。

『吹雪の話だけど、あいつとは、なるべく仲良くしてやってくれ』

『それをわざわざ言うために？』

『心配なんだよ、私は。ここでは楽しそうだけど、外だとあまり友達を作りたがらないんだよ、あいつは』

『吹雪先輩とは、長いんですか？』

『ああ、小学校に入る前からの仲だ』

『とにかく、頼んだぞ。あいつの友達が増えれば、私も嬉しい』

『分かりました』

『よし、今日はこれで終了！各自帰りの支度をせよ！』

治の返事を読み終えると、翠は声高らかに言い放った。それを聞いて外を見ると、いつの前にか夕闇の世界に変わっていた。

『いつもこのぐらいの時間にお開きなんですか？』

施錠をしている翠の後ろ髪を何となく見ながら、治は尋ねた。

『そうだな、いつもこのぐらいの時間だよ。昨日は遅すぎた』

鍵を閉め終えると、翠は解散を宣言した。皆別れの言葉を口にする、散り散りに去って行く。ここまでは昨日と同じだ。しかし、治が駐輪場にたどり着くと、見かけない顔と出会った。

「自転車、乗るんですね」

「ええ、乗るわ」と不機嫌そうに答えたのは吹雪だ。

治はその横を通り、自転車にまたがる。そしてペダルに足を置いた時、吹雪の、不安げな声を聞いた。

「翠に、何か言われたんでしょ？」

「はい。一応」

治は返事に迷ったが、正直に事実を言った。

「少し、歩いて話しましょう」

それは、治にとつて意外な言葉だった。ゲーム中の吹雪から察するに、てつきり癩癩でも起こすものかと身構えていた治だが、ゆつくりと肩の力を抜く。

「いいですよ」

治は自転車から降りると、吹雪の横に立った。そのまま、歩き出す二人。

校門を出る時、治は何気なく後ろを振り返った。薄暗い校舎には、まだちらほらと明かりの灯った教室が見える。辺りに学生の姿はなく、春の生暖かい風だけが、二人の間を駆け抜ける。

先に口を開いたのは、吹雪だった。

「私ね、信じられないかもしれないけど、結構お嬢様なのよ」

「信じられますよ」

治が短く肯定すると、吹雪は頬を緩ませた。

「だからね、たくさんの人が私に近づいてくるの。金、コネ、いろんなものを目当てにして。甚だ疲れたわ、もう」

「あの部活の人達は、そんなもの求めてないと思いますよ」

「そうね。だから私は、あの場所が好きなの」

好きなものを好きと言える感性を、羨ましいと思った。きっと吹雪は、自分の意思をはつきりと主張しないとイケない世界を生き抜いてきたのだろう。上に立つものの責任と、苦勞をとみにして。

「翠先輩、いい人ですよね」

「当たり前よ。私の親友だもの」

しかし、吹雪は一人ではない。翠という親友に、しっかりと支えられている。治はそれを、少し寂しく思った。

「今日はありがとう。楽しかったわ」

治のマンション近くにさしかかった時、吹雪が出し抜けに言った。

「家、近くなんですか？」

「あのビルのそばにあるの」と、吹雪はマンションの向かいにそびえ立つビルを指さした。「尾行したら殺すわよ」

「しませんよ」

治は両手を持ち上げ、首を振る。

「冗談よ」と吹雪は笑っていたが、冗談でも傷つくから言わないでほしい、と治は思った。

「それじゃ、また明日」

「はい、また明日」

短く挨拶を交わすと、それぞれの帰路に着く。去り際に吹雪は一度振り返ったが、治はとうとう気づかなかった。

三 発目

四月も残すところあと数日になる頃には、治も完全に部活に馴染んでいた。FPSの腕も、もう当初のように試合で右往左往することはないほどに。チームのメンバーとして役割を果たす、立派な兵士へと成長していた。

春のうらかな陽気の中、治たち五人がせっせと明け暮れているのは、例によってシューティングゲーム。カチャカチャと、昼下がりの快適さとは無縁の音が部室を包んでいる。たまに聞こえる茜の罵倒も、今やBGM程度にしか聞こえないくらいには治の耳も汚染されてしまったようだ。ちなみに今日は土曜日なので、授業は午前中で終わっている。

「そういえば、この部活、射撃部ってことになってるんですよ」
いつの日か廊下で見たポスターを思い出し、治はぼんやりと言った。

「回線切って首吊って死ぬ」と画面に向け捨て台詞を吐いた茜は、そのままパソコンの電源を落とした。そして腕を頭の後ろで組み、椅子の背にもたれかかる。伸びとともに色っぽい声をひとしきり放出した後、ようやく茜の耳に治の声が到着した。

「そうよ。私も最初は射撃部だと思って入部届を出したの」

思いがけない返答に、治は「うえ」とくぐもった声を出してしまっ

った。
「じゃあ茜先輩、本当は射撃部に入りたかったんですか？」

「うん。てつきりクレー射撃とかやるのかと思って、興味あったのよね。ゲームだと知ったときは、ちょっとがっかりしたわ」

その割には、ずいぶんと楽しんでいる気がするけど。

「でも、よく部活設立の申請が通りましたね。まさか生徒会の人まで騙したんじゃないでしょうね」

もちろん、冗談として言ったただけだ。しかしそれを言った途端、

部室の空気が変わるのを感じざるを得なかった。綾が、キーボードを叩いていた手を止めこちらを見る。茜は茜で、飲みかけのお茶が入ったカップを空中で制止させたまま、口をあんどりと開けている。嫌な沈黙と、目を見開いた二人。吹雪はゲーム中、翠は昼寝中。故に、驚いているのは綾と茜だ。

「あんだ、知らないの？」

茜は目を見開いたまま、信じられない、といった様子で言った。そしてゆっくりと腕を持ち上げる。床と水平になる位置になると、手のひらを握り、人差し指をピンと立てた。

「その人、生徒会長よ」

寝ている翠を指さし、茜はとんでもないことを口にした。

セイトカイチヨウ？ ああ、生徒会のトップである、生徒会長？

「ええええええええ！」

あまりに似つかわしくない単語に、大声を出してしまった。慌てて口をふさぎ、小声でもう一度確認する。

「生徒会長って、翠先輩がですか？ 冗談でしょう」

「なんで私が冗談を言わなくちゃいけないのよ」

茜が珍しく真面目な顔をしている。

うーむ、と唸りながら、治は寝ている翠の姿を眺めた。どこからかパクってきたのである。社長椅子に深く腰かけ、机に突っ伏して寝息を立てている。今日は長い髪を後ろで結っていて、眠る前に「昔の弓道部時代を思い出してみた」などと言っていたことを思い出す。呼吸に合わせ上下するその背中には、迷彩柄のタオルケットがかぶせられている。

これが、生徒会長？

「なんで今まで気づかなかったのよ」

あきれた口調の茜だが、それでもまだ治は信じることができない。「あんだ一年よね。入学式のときに、生徒会長のあいさつを聞いたんじゃないの？」

そういえば、そんな気がする。治は一ヶ月前の入学式を思い出し

た。確か、あの時のスピーチで……。

「生徒諸君、私は甚だ遺憾である。

もし、今の現代日本の姿を、かの有名な東郷平八郎氏をご覧になったとしたら、どう思うだろうか。うむ、当然良くは思わない。

近年の、自衛隊の軍備について、諸君らはどれほどの知識を持っているだろうか。私は、最近の軍備削減を助長する ような雰囲気、とても腹立たしくてならない。 もちろん、日本は憲法第九条により戦争を放棄している。

が、しかし、だ。だからといって、他国までもが戦争を放棄したわけではないということを、諸君らは考えるべきなのだ。

私は、今後しかるべき対応を日本政府に求めていくのと同時に……おい。そのハゲ頭、寝るな！」

壇上で新人生に向かって、ひたすら自衛隊について弁舌をふるっていたのは、この人だったのか。

「ということは、翠先輩が独断で部を設立したってことですか？」

「まあ、そういうことになるわね」

どっちにしたって非道には変わりないじゃないか。この部室の中では唯一の常識人だと思っていたけれど、どうやら考えを改める必要がありそうだ。

「もしかして、あの本棚も、本も、エアコンも、ガスコンロも、パソコンも……」

「そう、全て部費で買ったのよ」

とんでもない悪魔だ。さぞ教師たちには恨まれているに違いない。当の本人は、いたって健康にぐうすか寝ているわけだが。

それにしても、と治は思った。春の陽光は心地よく部室内を照らし、油断するとすぐにでも船を漕ぎ出してしまいそうだ。すでに一名脱落者がいるものの、先ほどからあくびを繰り返しているのは、何も治だけの話ではなかった。茜の本日三回目のあくびに釣られて、

負けじと治も大口を開ける。

「いつそ、寝てしまおうか。夕方になれば、綾か吹雪が起こしてくれるだろう。どうやら茜も同じ考えらしく、鞆から迷彩柄の　　また迷彩柄か　　タオルケットを取り出した。

「ねえ、ちよつといいかしら」と吹雪が言わなかったら、おそらく二人とも安眠を手に入れていただろう。

「なんですか、吹雪先輩」

「あなたもずいぶん慣れたみたいだし、試しに撃ち合いしてみない？」

暇が潰れるのなら何でも、と隣を見ると、茜も取り出したばかりのタオルケットを鞆に戻している。

「わかりました。2：2でいいですよ」

人間の環境適応能力は大したものだ。前は歩くこともままならなかった治だが、今や撃ち合いを誘われてもまったく動じない。

チーム分けの結果、《黒猫》《人間失格》チーム対《消しゴムメキシカン》のような君》となった。ちよつど、隣同士の組み合わせだ。「ルールは殲滅。時間切れの場合、生き残っている人数が多い方が勝ちでいいわよね」

水を得た魚のように、手中のMP5サブマシンガンをいじりながら茜が言った。

「問題ないわ」と返事をした吹雪が持つのは、M4A1アサルトライフルだ。モニタを挟んで向かい合う二人の視線が、バチバチと青い稲妻を発しているように見える。

最近になつてようやく自分の使用する銃名憶えた治は、G3A3を肩に掛けると、注意深く綾の装備を確認した。

おそらく、この勝負の行方を決めるのはスナイパーである綾だ。そしてその手にしっかりと握られているのが、VSS、消音装置の付いたセミオートの狙撃銃。

「綾、本気で殺しにきてるわね」と茜が震えた声で言った。

「それ持って一人で突っ込まないでくださいよ」

治は茜の持っている装備を見て忠告する。茜が持っているのは、突撃用で重量の軽いサブマシンガンだ。戦略など微塵も考えずに敵に突っ込む茜にはぴったりの銃だが、少人数戦での信頼度はイマイチ。

「わかってるわよ」と茜は口を尖らせる。本当にわかってるのだろうか。

「マップは港でいい？」と吹雪が同意を求める。皆異存はないので、うなずいてみせる。

画面が暗転し、マップ名である《Heil Port》の文字が表示される。数秒後四人は、うずたかく積まれたコンテナが多数ひしめき合う港へと召喚された。隣には《黒猫》と頭上に浮かぶ兵士の姿がある。きつとマップの対極の位置にも、同じように二名の兵士が開戦を待っていることだろう。

『始まつたら、まず私が突っ込むから。あんたは後ろからカバーして』

喋って作戦をばらさないためか、茜はチームチャットで意図を伝えてきた。待てよ、やっぱり突っ込む気満々じゃないか。早くもクラウチングスタートのポーズをとっている茜をなんとか思いとどまらせるべく、高速で文字を打つ。

『とりあえず最初は様子を見』

《FIGHT!》

治が書き終える前に、冷酷なシステム音が開戦を宣言した。当然、治が文章をタイプするのを止まって待っている茜ではない。

『GO! GO! GO!』とラジオチャットまで使い、突撃を促す前方の馬鹿。目指しているのは……どうやら敵陣の方向らしい。無鉄砲に勝負を挑んで殺されるのはごめんなので、それを無視して近くにあったコンテナの陰に身を隠す。

少人数戦を想定して作られたこのマップは、それほど広くない。港というだけあって海に囲まれているが、システム上、海に入ると即失格になってしまう。陸側にはフェンスがあり、その先は進入不

可ゾーンとなっている。ほぼ正方形の地形の中にあるのは、大小様々なコンテナと、木材、鉄骨といった運搬物資だ。

後ろから治がついてきてきているものと信じている茜は、それから数秒もしないうちに敵本陣へとたどり着いてしまった。敵を挑発する声がここまで聞こえているが、あれでは格好の的ではない。

声が止んだ。治は嫌な予感がして、半ば反射的に画面右上を見た。画面右上の戦死者を示すキルログに《黒猫》の文字が流れる。殺害者の名前は《消しゴムのような君》。どつりで音がしなかったわけだ。

「あ」とつぶやいたまま、呆然と画面を見つめている茜。本人はまだ何が起こったのか理解していないようだ。

「ちよっと、何勝手に突っ込んで勝手に死んでるんですか」

治が言うと、やっと脳が稼働し出したのか、徐々に表情が納得したというものに変わっていく。そしてついに理解したと同時に、叫んだ。

「カバーは！？ あんたカバーはどうしたのよ！」

「敵陣に乗り込んで、カバーも何もありませんよ」という反論は、茜にはまったく届いていない。

「もう！ なんなのよ！ これだからへたれと同じチームはイヤ」
自分が早々に負けたことに怒り心頭な茜の罵倒は、いつになく耳を覆いたくなるほど酷いものばかりだ。

「落ち着いてください。敵がどこにいたのかくらいわかりませんでした？」

「わかるわけがないじゃない！ 無音で殺られ」

全ての言葉を聞く前に、耳のすぐ横を銃弾が掠めた。身を隠していたコンテナには穴が空き、そこから鉄の焦げた匂いと煙が立ちこめてくる。頭で考えるよりも先に、手が動いていた。

走る。

コンテナの間を、縫うように走る。安全地帯を見つけようにも、止まった瞬間に頭を撃ち抜かれるような気がしてなかなか足を止め

ることができない。

どこにいるかもわからない狙撃兵。治を狙っているのは、連射可能な、無音の弾を撃つ狙撃銃だ。

生きている心地がしない。スタミナを表している黄色いバーは、とつくに空になり灰色をしている。走ることができず、這うようにしか進めなくなっても、それでも、止まることはできない。

やっと休憩することができたのは、二つの巨大なコンテナの上を、いくつもの木材がふさいでいるトンネルのような場所に着いてからだった。ここなら、高い場所から狙い撃ちされる可能性はない。

一気に走ったため空になったスタミナのバーが回復する間、治は作戦を考えていた。相手は、狙撃銃を持った《消しゴムのような君》だけではない。三十発の弾丸を超精度で撃ち出すことができるM4を担いだ《メキシカン》が、狙撃銃の狙うことができない入り組んだ場所をカバーするようにあたりを索敵していると思うと、迂闊に動くことができない。

考える。狙撃を避け、対等に勝負できる作戦を。

籠城しかない。

冴えない作戦だが、今の治に残されている道はそれしかなかった。頭上の木材に向け銃を乱射し、もろくなった一部がそのまま崩れ落ちる。トンネルは、あっという間に一方通行の洞窟へと変化した。

「よし」

何が「よし」なのかわからないが、治はマガジンに入った二十発全てを撃ち尽くすと、リロードをしてから、治にとっての出口に向き直った。敵も音を聞いて、この位置がわかったに違いない。コンテナと木材によって四角く制限された視界では索敵もままならないが、それは相手にとっても同じだ。この制限された空間を攻撃するには、治の視界内から攻撃するしか方法はない。

しばらくすると、木材の上に誰かが乗る音がした。治は微動だにしないまま銃を構え続ける。残りマガジン数は一つしかない。できるだけ無駄撃ちを避けたい治は、むやみに上を撃つことはしない。

もう少し経つと、木材の上を歩き回る足音が二つに増えた。敵も馬鹿じゃない、どうしたら中を攻撃できるのかどうか、考えているのだろう。

足音が、止まった。

いよいよか、と治は身構え、グリップを握る手に力を込める。安全装置は解除済み。弾数はフルに二十発。威力は心許ないが、腰には拳銃だつてついている。いざとなれば、サバイバルナイフ片手に戦闘をする覚悟だつてある。舞台は整った。さあ、来い！

金属音が、二回。

洞窟に投げ込まれた黒い球が、二個。

二つの球がバウンドして足元にたどり着くまで、治はそれを飴玉だと信じていた。いや、爆発し、炎のエフェクトが画面いっぱいに表示されていて、きつとそれは飴玉だったに違いない。だって、酷いじゃないか。

「どうやら私たちの完封勝ちみたいね」

吹雪は満足そうに言いながら、綾と肩を組んでいる。

画面には爆発して燃えさかる木材と《YOU LOST》の文字。

「くううう！ 腹立つわ！ もう一度勝負よ。勝つまでやるわ。治、さっさと準備しなさい」

敗因は開幕二十秒で死んだ自分にあるとはまったく考えていない様子で、茜は言った。しかし治も、負けるよりは勝ちたい性格だ。

「次は作戦を立てていきましよう。まずはここにですね……」

「見てなさい、次は絶対勝つから」

首を傾げながらも熱心に作戦を聞いていた茜だったが、果たして次はどうなることやら。

二時間後、寝ぼけ眼をこすりながら、翠が目を覚ました。

「よく寝た……って、お前ら何してるんだ」

寝起きの翠が見たのは、ゲームに明け暮れる四人ではなく、席から立ち上がり腕を振りかぶる茜と吹雪。それを止めようと健闘して

いる治の姿と、いつも通りの綾だった。

治から事情を聞く間、腕を組みながら時折うんうんと頷いていた翠だったが、全てを聞き終えるとニヤリ、と不敵な笑みを浮かべた。「……なるほど、そういうことか」

「何がそういうことなんですか？」と治は恐る恐る言う。

「つまりは、だ」と翠は組んでいた腕をほどき、机をバンと叩く。

「面白そうだから私も混ぜろ」

その場にいた全員が、きよとんとした顔で翠を見た。それも当然で、翠の後ろに輝いている太陽はすでに半分沈んでおり、空は綺麗なオレンジ色に染まっている。

「一対一のトーナメント戦がいいな。あ、勝負を面白くするために、武器も制限しよう」

有無を言わせぬ口調で翠は続ける。

そして思い出したように顔を上げ、

「明日、日曜だから平気だろ？」と爛々とした表情で言った翠に、誰も反論できないのだった。

四発目

日曜の睡眠を邪魔する輩は、誰だろうと許さない。ただでさえ昨日は部長のわがままにつき合って、土曜日を丸一日潰したというのに。黙れ携帯。今すぐ止まれ。お願いだから止まって……。

「はい、植村です。部長？ 今からですか？ ちよつと待つ」

携帯を耳に当てたまま、ただ呆然とする治。だんだんと力が込められ、そろそろ音を立ててきしみ始めた携帯を、眼前へと移動させる。今の時刻は、午前八時三〇分。

治は数秒前電話に出た自分を呪いながら、ぬくもりの残る布団から這い出た。そして大あくびを一つ。ぼりぼりと頭をかきながら、着ていたジャージを脱ぐ。

部長は確か、こう言っていた。

『おお、起きたか《人間失格》くん。なあに、大した用事じゃない。今から吹雪の家の向かいにある喫茶店に来てくれるか。吹雪がそう言えばわかるって言ってたんだが……それじゃ、健闘を祈る』

何が健闘を祈る、だ。そうはいつても、休みの日に女子の先輩から呼び出されるといふものは、気分の悪いものじゃない。それが、南川高校生徒会長の長谷川翠からの呼び出しとあらばなおのことだ。うむ、よくよく考えてみれば、実にいい日曜日じゃないか。

治はTシャツにジーパンというラフな格好に着替えると、無地のパーカーを羽織り外に出た。呼び出されたのが喫茶店ならば、朝食もそこで済ませられるだろう、と考えながら、治は自転車にまたがる。

もしかするとデートかも、などということも少しでも考えた数分前の自分を、今すぐ絞め殺したい。治は喫茶店に入るやいなや目に飛び込んできた四人を見て、己の愚考を恥じた。

「おー、こっちこっち」と立ち上がり手を振る翠。そのまま立ち去りたい衝動に駆られながらも、治は四人のいるテーブルに向けて歩

き出す。

「ご苦労であります」と敬礼を決めた翠を、治は哀れみの表情で見
る。

「なんですか、その格好」

上下を迷彩柄の服で固めた四人。綾に至っては、ご丁寧に黒色の
ヘルメットまで頭に乗せられている。どう見ても浮いている。どう
考えても先ほどから周りの視線が気になる。

「ちょっと、なんであんなだけ普通の服なのよ」

茜が立ち上がり言い放つ。なんで、と言われても……。状況がつか
めない治は、ますます混乱して辺りを見回す。

「すまん、治くんには言いそびれた」

「何をですか」と治は聞き返すが、その先はできれば聞きたくない。
「今日はオフ会の予定だったんだ」

治の淡い期待をばつさり切り落とすかのごとく、平然とした表情
で翠は言った。オフ会、話には聞いたことがある。なんでもネット
での知り合いと、現実世界で会うことらしい。しかし、どうしてもま
たオフ会なのだろう。ここにいる五人は毎日部室で会っているわけ
だし、治にはネットでの知り合いなどいない。釈然としないながら
も、ぐう、と鳴った腹に手を当て、そういえば朝食を取らずに家を
飛び出したことを思い出した。

「僕、朝ご飯食べてこなかったんですよ。今から食べても構いま
「よし、出発だ」

治の哀願もむなしく却下され、いそいそと店を出ようとする四人
仕方がないのでレジ横に並べられていた持ち帰り用のサンドイッチ
を二つばかり買い、治は急いで後を追った。

先頭を切る翠、吹雪に着いていくこと三十秒で、目的地であるオ
フ会場に到着した。そう、喫茶店の向かいにある、夏目財閥の所持
するオフィス・ビルだ。どうやらビルの三階にある大講堂が今回の
イベントに使用されるらしく、楽しそうにパンフレットを眺めなが
ら茜が解説をしている。この人物が「本当はクレー射撃部に入りた

かった」などと言っくくらいだから、この世の中が到底信じられない。ビルの所持者である夏目財閥の娘なら、中の勝手には当然詳しいのかと思っていたが、案外吹雪の様子は、辺りを見回して感嘆の声を漏らしている茜のそれと変わらない。そればかりか、必要以上に視線を気にしているようにも見える。

「どうしたんですか？」と治が聞いた。

「私たち、ちょっと目立ってない？ 私、こういう人が集まる場所って慣れてなくて……」

「目立って、そりや当然ですよ」

ただでさえ男ばかりの会場の中に若い女の人がいるってだけでも好奇の視線を向けられるのに、ましてや今の四人の格好は軍服だ。これで目立たない道理がない。ひょっとしてこの人、思ったより馬鹿なんじゃないか？

どうやら自分たちの目立っている理由がわかっていないらしい吹雪は、治の言葉にも首を傾げ、あたりをきよるきよると気にし続けている。そしていつもは脳天気な茜でさえ、言動に覇気が感じられない。普段ならば「こいつらがいつもなかなか死なない連中なのね。まずはどいつからぶっ殺そうかしら」と騒いでいそうなものだけど、今は借りてきた猫のようにもじもじとしている。これはなかなか面白いことになりそうだ、と治は先ほど買ったサンドイッチを頬張った。

治は人嫌いで会話は苦手だが、こういった不特定多数の人が集まる場所は特に苦手ではない。相手とコミュニケーションを取る必要がないし、相手も対話を望んでいるわけでもない。全ての人間がよそよそしいこの場所は、治にとってはむしろホームに等しいのだ。

「あれ、綾がいないわ」

いつのまにか綾がいなくなっていることに茜が気づいた。人でごった返している空間で、迷子。どう考えても最悪だ。イベント開始も直前に迫っている。

どうしたものか、と治が視線を動かすと、いた。

不自然な人だかりの中に、ぼつんと綾が突っ立っている。その周りには、カメラ、カメラ、カメラ。大量のカメラに囲まれた軍服姿の綾が、写真を求められ狼狽していた。

「何してんのあんたたち！ 綾から離れなさい！」

同じく綾が困っていることに気づいた茜が、一目散で飛んでいき牽制するように持つていた鞆を振り回している。しかし、カメラ連中にとって茜の登場は、単なるサプライズでしかない様子だ。「おっ」と歓声が沸き、フラッシュの数が増える。こうなってしまうっては、もはや治にはどうすることもできない。

「部長、放っておいていいんですか？」と隣にいるはずの翠に助けを求めるが、あれ、いない。もしかしてあの人まで迷子か。いや、もっと酷いかもしれない。治はそう遠くない位置に緑の姿を見つけ、頭を抱えた。

「お、みんなこつち。この席だ！」

並べられたパイプ椅子に自分たちの席番を発見したらしく、大声を出しながらこちらに手を振る翠。もちろん彼女も軍服なので相当目立っているが、当人は一向に気にしていない。

「恥ずかしくないんですか、その格好」

「何のことだ？ それよりも綾と茜はどうした」

気にしていないどころか、軍服を私服だと言わんばかりの馴染みよう。もしかすると本当に普段着なのかもしれない。

しばらくすると、茜が綾を連れ戻ってきた。「置いていくなんて酷いじゃない」と治は耳をつねられたが、あの状況でどうしろというんだ。

突如、会場の電気が消えた。昼間といえど窓には暗幕がかけられているようで、会場内はほぼ真っ暗。ところどころで期待を込めたようなどよめきがあがる。それもひとしきり収まると、今度は会場手前のステージに設置された、特大モニタが点灯した。書かれている文字は、

《ようこそ、サバイバル・シューティング オフラインイベントへ》

何のおもしろみも感じられない文句だが、あちこちで「おおお」とか「いえええ」という歓声の音が聞こえる。もちろん治の横に並んでいる面々も例外ではない。先ほどまでおとなしかったのが嘘だったかのように、茜、吹雪も腕を上げ叫んでいる。

ステージの上に、ゲームタイトルのロゴが入った黒のＴシャツを着た男が上がってくるのが見えた。男は当然のように係員から箱のようなものを手渡され、当然のようにその箱の中から何かを取り出した。

「あれなんですか」と隣の茜に質問する。今日までオフ会に行くなど知らなかったのだから、これくらい聞いてもいいだろう。

「ボールよ」とシンプルかつ明確な答え。しかし治が聞きたいのはそういうことではない。

「なんでボールなんですか」

「ボールじゃなくてなんならよかったわけ？」とこれではまるでコメントのようだが、今や会場の空気は箱から取り出される例のボールに全神経を集中させるかのごとく沈黙していて、声を出すことすらはばかられるのだ。そんな中では、言いたいことの一も言えない。

「もういいです」と話を切り上げ、治はステージへと目を戻した。箱から取り出されたボールには数字が書いてあったらしく、モニタには15の字が表示されていた。なるほど、何かの抽選をしているわけか。抽選をしているということはわかったが、「何の抽選をしているのかわからない」という治の疑問とは無関係にイベントはどんどん進んでいく。箱からはもう一つのボールが取り出され、モニタには新しく46と書き足された。そのときだった。

横で静観していたはずの面々が立ち上がった。それぞれ喜びの声を上げたり、ポーズを決めたりと反応はまちまちだが、どうやら46という番号は自分たちを表しているらしい、ということにやっと治は気がついた。

「では、番号を呼ばれたチームは前に出てください」

ステージの男が、あり得ないことを口にした。前に出るだって？

冗談だろ。

ところが、何も気にすることなく歩き始める四人。うるたえているのは治ただ一人だけだ。会場の反対側からは、15番のチームらしい人たちがステージに向け行進しているのが見える。

治は覚悟を決めた。何の覚悟かはわからないが、軍服姿で歩く四人を走って追いかけるその姿は、十分軍服に劣らぬ目立ちっぷりをしていた。

ステージの上から会場を見下ろすと、あれほどいた人数も、二百人程度だということがわかった。女性の姿もちろほら見えるが、やはり圧倒的に男衆の数が多い。そしてなぜかほとんどの人間が黒い服を着ているため、会場全体が黒い塊に見えるという奇観をしている。

「一体ここで何をやるんですか」

さすがに堪えきれずに、治は隣で腕を組んでいる茜に問いかけた。「試合よ。見ればわかるでしょ」と茜は短く答え、緊張からか仏頂面で腕を組み続ける。

確かに治たち五人の前には、モニタ側を向くようにして置かれたパソコンが五台ある。同じように横に並んでいる15番チームの前にも五台のパソコンがあるようだが、まさか、ここまで来てゲームをするなんてことは……。

「それではご着席お願いします」

嘘だろ、と治は思った。同時に、この無慈悲な声の正体にやっと気がついた。この声質は、あのシステム音の主じゃないか。まさかあの陽気な外人を思わせる軽快な声が、こんなに特徴のない男のものだったとは。少しショックを受けた治は、よろけながらもなんとか席に座った。席順は、リーダーである翠を左側にし、そこから順に綾、吹雪、茜、治の並びだ。

相手チームが着席すると、システム音の男がルールを説明した。要約すると、以下の三つになる。

ゲームモードは、目標物の爆破、阻止を行う《爆破》
攻守交代なし

勝利条件は一点を先取すること

つまり一発勝負ってわけか。

「それでは両チームリーダー。じゃんけんをお願いします」とシステム音の男が言う。

相手はグー、翠がパーを出し、こちらのチームは爆破側に決定した。勝利条件は、相手チームを全滅させるか、目標物に爆弾を仕掛け爆破するかだ。

この一ヶ月、幾度となく茜に罵倒されたが、それでも根気強くFPSというものを学んできた。ルールを覚え、用語を覚え、マップを覚え。昔の自分からすると、信じられないような友達もできた。

いよいよ緊張が回ってきたようだ。二百人のギャラリーの視線を背中に感じ、思うように指が動かない。装備のセッティングでまごつき、さらに焦りを増大させる。

震える左手に、不意に別の手がかぶせられた。その手の主を、治は知っている。

「だいじょうぶ。私が教えたでしょ」

茜の手。部屋を思い出す。「直感と、視線は常に画面全体を見る」
『ここはラブホテルじゃないぞ』

イベント会場だというのに堂々とチャットを打つのは、一人しかない。翠だ。「敵を撃つ。それだけ」

(負けたら承知しない)

視線に込められた悪寒。綾だ。今は不思議と自身が湧いてくる気がする。「前を見る」

治に見向きもせずフルセッティングを行っている吹雪。まったく、どこまでも大物だ。

吹雪に言われた言葉を思い出す。「自分で調べなさい」

そうかもしれない。本当は、自分で調べるべきなのかもしれない。

でも、人に聞けるってのは、幸せなことなんだ。

『《黒猫》、開幕トイレに援護頼む』

『了解。なによ、急にやる気になったじゃない』

『ではトイレの制圧は《黒猫》《人間失格》の二人に頼む。残りの二人は私と一緒に中央の制圧に加わってくれ』

『了解』

『了解よ』

開始前の、五秒のカウントダウン。

永久にも思える五秒の後、決戦の火蓋が切って落とされた。

戦陣を切ったのは、《黒猫》《人間失格》ペア。重要拠点であるトイレまで全力で走ると、滑り込むようにしてスモーク弾を撃ち込む。弾が壁にぶつかり、煙が放散する。途端にトイレ内は視界不明瞭になり、二人は崩れかけた壁の陰に伏せるようにして隠れた。

ここまでのタイムはわずか十秒足らず。しかし、油断は禁物だ。間髪入れずに、茜が煙に向けサブマシンガンを乱射する。複数のうめき声がし、煙の中からでたらめに弾が飛び出してくる。

『リロード』と《黒猫》がラジオチャットで合図をする。

『了解』と治が短く答え、《黒猫》の射撃が止むのを見計らいトリガーを引く。

二人合わせて三十秒間もの連続射撃が終わる頃には、完全な静寂がトイレを包んでいた。

じつくりと煙が晴れるのを待ち、戦果を確認する。そして中央組へと報告する。

『トイレ、クリア。敵は二人ダウン』

『ナイスショット！ 中央は依然動きなし……いや、ちょっと待て司令塔である翠の不安げな声の後、地を這うような低音が轟いた。それは離れたトイレにいる二人の耳にもはっきりと聞こえた。』

右上のキルログに、《翠空鎌治》の名前が流れる。

「クソッ！」と翠が叫んだ。ヘッドフォンを外し、悔しそうにキー

ボードの上に投げる。「敵陣付近にスナイパーが警護してる。注意して」

「了解」と返事したのは対スナイパーが本職である綾だ。

『トイレ組は倉庫まで押して。中央は私たちで確保する』と《メキシカン》が指示を出す。

開幕で二人を倒したとはいえ、相手もカバーを送っているはずだ。トイレに転がっている二つの死体をまたぎ、倉庫の様子を半身でうかがう。そこは予想通り、グレネードがいくつも投げ込まれた痕があり、木材や装備の類いが散乱していた。指示を待たずに突っ込んでいたら、間違いなく二人とも爆死していただろう。

注意深く倉庫に踏み入る。敵の姿は見当たらない。

目の前の《黒猫》が指を動かし、数メートル先の箱の裏をチエツクしろと促している。治はその指示の通り、小走りで一歩を踏み出した、瞬間。

銃撃。箱がバラバラになり、あたりに飛び散る。違う、今心配するのは箱ではない。治の反応で敵を撃ち倒せたものの、それまでの数秒間、茜は弾を一人で受けたのだ。急いで横に駆け寄り、安否を確認する。

ガチャ、とヘッドフォンを外す音がした。

「ごめん、死んじゃった」

嫌だ。何で。どうして。いやだ、いやだ、いやだ。

「死ねッ！」

我を忘れ、つい先ほど倒したばかりの敵の体めがけ発砲する。無論当たり判定はないが、これは立派なマナー違反だ。

巨大モニタに堂々と死体撃ちが表示され、会場の空気が一気に重くなる。一部ではブーイングの声も上がり、スタッフも大慌てで会場をなだめる。

「ちよつと、落ち着きなさい。ね、治」

茜の制止も振り切って、ついに治は全弾を撃ち尽くした。それでもトリガーを引くことを止めず、チャ、チャ、と弾切れの音がむな

しく鳴り続ける。

この中で笑みをこぼす者が、一人いた。当たり前のように先を予測し、戦略を考えていた者が、一人いた。残りの敵、三人の名前が、連続で右上に表示された。その名前の横には、FPSプレイヤーにとって最も屈辱的なマーク。ナイフマークが点滅していた。

あなたがやりたかったのはこういうことですか。

「おーっと、ここで《消しゴムのような君》選手が連続ナイフキル！ マナー違反に逆上して棒立ちのところを狙うようにキルしたあああ！」

興奮気味にスタッフが会場を煽る。「うおおお！」とボルテージが最高潮に達する会場。

何が起こったのかわからない、という顔で会場を顧みている茜。

……それも当然だ。

「いやあ、傑作だったよ治くん。あの演技はプロだね」

帰り道、事の発端である翠が説明をすると、茜はひとり激昂して先に帰ってしまった。

「『仲間が撃たれたらキレたように敵の死体を撃て』ですか。本当によかったんですか、会場ドン引きでしたよ」

「最後には盛り上がってたじゃないか」とまったく反省の色がない翠。「それに、少し暴れたほうがスパイスが効いて面白いじゃないか」

この人には勝てない、と治は思った。

茜には気の毒だが、作戦を伝えられた治と、席が隣り合っていた綾以外には計画を知らせる術がなかったのだ。

それにしても、翠が倒された瞬間、治の携帯にメールが届いたのには驚いた。死者がまだ生きているプレイヤーにチャットを送るのはルール違反なので、やむを得ずメールを送ったんだとは思うが、「あなたにはルールを守るっていうプライドはないんですか」

「そんなものは私の辞書にはない！」

言い切りやがった。

とはいえ、作戦を知らなかったのは茜以外にも吹雪がいたはずだ。しかし、治が死体を撃ち始めても吹雪は冷静を保ち続けていた。

それとなく翠に近づき、「吹雪先輩にも作戦を伝えたんですか？」と聞いてみた。

「いや、この作戦を考えたのは吹雪だ」

……は？

「なっ、吹雪！」と勢いよく肩を組む翠。

「作戦なんてものは前日には完成させるものよ。覚えておきなさい」振り向きざまに言ったその目を、治は絶対に忘れないだろう。

ナポレオンもびっくり。生まれた時代が時代なら、この人は世界を征服していたかもしれない。

五発目

月曜日の放課後、例によって部室には、険悪なムードが立ちこめていた。理由は、言わずもがな。昨日のオフラインイベントで、茜にだけ作戦を伝えなかったという事件が、未だに後を引いているらしい。

引いているらしい、というのは、治が部室に到着したときにはすでにこの状況だったからだ。治はなるべく窓のほうを見ないように心がけながら席に座る。習慣でパソコンのスイッチを入れると、起動するまでの間、この問題をどう処理したものかと頭を捻ってみる。無駄にハイスペックなパソコンが立ち上がるまでの短い時間で、解決策が思いつくはずもなく。治は救いを求めるように、部室内に視線を泳がせた。

現在この部屋にいるのは、綾、治、茜の三人だけ。吹雪と翠は、生徒会の仕事で今日は部活に来られないらしい。吹雪までもが生徒会に所属していたという新事実に驚きたいのは山々だが、今はそんなことはどうでもいい。窓際のアレをどう処理するか、という問題が、今は最優先だ。

そう、窓のすぐ横に置かれた椅子に座り、文庫本を開きながら俯いているアレだ。

『どうすればいい』と治はキーをたたく。

『なにが』と返事を書くのはもちろん綾。

『窓のところにいるアレだよ、アレ』

『ああ、アレね』

ひたすらに「アレ」呼ばわりされているのは、珍しくパソコンも点けずに、近づくなと言わんばかりに椅子上を占拠している茜その人だ。その手には　まだ核ミサイルのスイッチのほうがつくってくる　似合わなすぎる文庫本を携えていて、どこか哀愁を漂わせている。名のある画家にスケッチをさせたら、名前の通り「茜」と

題せるような名画になりそうだ。

『まだ日曜のことを気にしてるのかも』

『あれは吹雪先輩の考案らしいからなあ。僕にはどうすることもできない』

治はパソコンから顔を上げ、もう一度茜の姿を見た。夕焼けが差し込む窓辺。陽射が髪を赤く染めている。名のある画家にスケッチをさせたら、名前の通り『茜』と題せるような、風趣のある名画になってもおかしくはない、実に絵になる光景だ。綺麗だと、素直に思う。

『綺麗でしょ。私も昔から好きなの。茜ちゃんのああいうところ』

綾が茜のことを「茜ちゃん」と呼ぶのは、これが初めてではなかった。前から気にはなっていたが、聞く機会がなく必然的におざなりになってしまっていたのだ。意を決す、というわけではないが、この際聞いておこう、と治は思いキーをたたく。

『えっと、石原先輩とは親しいの？』

普段茜を名前を呼ぶことは少ないので、慣れない語感にどうも照れくさく感じてしまう。

『小学生の頃から同じ学校なの。家も近所だし、よく姉妹に間違われる』

なるほど。言われてみると、二人にはどこか似た雰囲気がある。両者ともそれほど長くない髪に、目の風貌も、張りがありそれでいて落ち着いているという共通点がある。見たところ背丈も数センチしか変わらないようだ。並んで歩いているのを想像すると、確かに姉妹に見えなくもない。

『昔ね』

唐突な書き出しに、治はキーボードを打つ手を止めた。

少しの沈黙のあと投下された長文に、治は目を落とす。

『昔、こんなことがあったの。私、見ての通り人前では喋るのが苦手で、それが原因で、小学校のとき男子にいじめられたことがあったの。学校に行くのが嫌で嫌で仕方なかったあの頃、茜ちゃんだけ

が私の味方だった。毎日ね、学校の帰りに笑いながらこう言うの。
「今日も綾と学校に来てよかった」って」

治は、しばらく何も書けなかった。かけるべき言葉のどれもが間違っている気がする。自分には、気休めしか言うことができないのだと思うと、やるせない気分が押し寄せてくる。

『でも意外だな。石原先輩にそんな一面があるなんて。あんなこと、笑って気にしないのかと思った』

悩みに悩んで書いた無難な言葉。陳腐な言葉。

『茜ちゃんは優しいから。きっと本気で心配したんだと思うよ』

妙に落ち着いた、含みのある文面に、治は聞き返さずにはいられなかった。

『どういうこと?』

『茜ちゃんがあのとき撃たれて、それで治があえてマナーを破る行動をしたじゃない』

『うん』

『だから、自分のせいだと思ったんじゃないかな。治がああなったのは。なんとかしなきゃ、って本気で心配したんだと思う』

胸の奥が、ずんと沈むような感覚に陥る。本気で治を心配し、本気で助けようとした、茜。

なら。それなら。言うべき言葉は、一つしかない。

『僕、お礼言わなきゃ』

治は立ち上がり、窓へと歩き出した。茜はまだ気づかない。やっと、治がその横にたどり着く。

最初の言葉に詰まる。「茜」。やっぱり、名前を呼ぶのは照れくさい。

「い、石原先輩。その、昨日はありがとうございました」ところどころどもりながらも、なんとか胸の内を告白する。「それと、すみませんでした。でもあれは、作戦上仕方なかったっていうか、それでも、僕、嬉しかったです」

顔を真っ赤にしながら治は言い切った。これでは下手なプロポー

ズに思われてもおかしくない。

意に反して、茜はまだ気づかない。……あれ？ 治は異変に気づき、依然として俯かれたままの顔を覗き込もうとする。

「……ん。ありえ、治、何してるの？」

目をこすりながら、茜がやつと顔を上げた。口元を拭い、まだ覚醒しきれていない様子で治を見上げている。って、おい。

「もしかしくなくても、寝てましたよね」呆れ果てた様子で治は言う。「うん」対して茜はいたってマイペースだ。

治は高速で首を90度回転させると、くすくすと笑っている綾を見つけた。騙されたのかもしれない、とやつと気づいた治は、とりあえず首を元に戻した。

「すみません、何でもありません」と後ずさりをするが、茜が黙って見過ごすはずがないのは治も重々承知だ。

「待ちなさい」

眠っている女子の顔を、顔を真っ赤にしながら覗き込もうとしていた男。どう考えても怪しいと考えるのは、ごく自然なことだ。

治は終始「僕じゃないんです」と繰り返していたが、むしろ火に油を注いでいるのと同義だった。「何が僕じゃないのよ！」と茜はさらに激怒し、文庫本で治の頭をバシバシと殴る。途中ブックカバーがはがれ落ち、本のタイトルが明らかになり、ますます治は愕然とする。

『世界の銃、完全ガイドブック』と書かれた本。帯には有名な軍事評論家の名前で書評まで載っている。少なくとも、女の子が悩みながら読む本ではない。

「僕じゃないんです！」と叫ぶ治。土下座。

「変態！」と振りかぶる茜。

ガチャリ、と開くドア。

生徒会の仕事を早く終え戻ってきた吹雪と翠が、奇観を目の前にして凍りついた。

「なんだ、痴漢か」翠があからさまに嫌な顔をして言う。

「僕じゃないんです！」

どうやら治の冤罪は、すぐには晴れそうにない。

「ときに治くん」

てつきり面白がって騒ぎ立てるかと思ったが、翠と吹雪はいたって平然と　まるでラブホテルの一室で練り広げられるバトルのような　その光景を見つめていた。できれば言い訳の余地を求めようかと思ったが、どうやらそんなことを言っている場合じゃなさそうだ。

「健全たる男子生徒代表として、助言を求めたい」

「……は？」

あまりに突拍子もない台詞に面食らう治。

肝心の翠はそのままつかつかと自分の椅子まで進み、勢いよく腰かけた。そして大きなため息をつくと、鞆から飲みかけのペットボトルを取り出し、グビグビと飲み始める。

状況が掴めない治は、しきりに瞬きを繰り返しながら、先ほどまで自分の頭をパソコン叩いていた茜とアイコンタクトを取る。

彼女もあっけらかんとして治を見かえし、疑問をぶつける。

（今の、なんだったんですか？）

（私を知るわけじゃないじゃない。あんたが確かめなさいよ）

（嫌ですよ、僕だってまだ命が惜しいです）

ぶはっ、と景気の良い息継ぎが聞こえた。

いい加減先が気になるので、治もとうとう「健全たる男子」として質問をすることにした。

「あの、どういうことですか？　健全たるなんとかってのは」

「そう先を急ぐな。まあ、わけあってだな……」

不可解な沈黙。吹雪が不可解な咳払いを挟む。ますますわけがわからない。

「その、だな」と珍しく歯切れの悪い調子の翠。

「女子生徒の体操着ってのは、男子にとってはどういいう存在なんだ

」

微妙に頬を紅潮させフラフラと視線をさまよわせながら翠は言った。

「どういう存在？ それはどういう意味だ？ ただの衣服じゃないのか？ 様々な感情が交差し、頭がオーバーヒートする。そればかりでなく、治と同様隣で棒立ちになっている茜からは、いつのまにか哀れむような視線が向けられている。」

「なんで僕を見るんですか」

「いや、気持ち悪いなと思って」

大いに落胆している治を見て、翠は大慌てで訂正をする。

「落ち着け茜。何も治くんが犯罪者になっただけじゃない」

「当たり前ですよ。勝手に犯罪者にされちゃ困ります」

「今日、生徒会の話し合いで、三年の女子生徒の体操着が立て続けになくなるって事件について話し合われたの」と吹雪が事情を説明する。

「それで私は、男子の作業じゃないかと思ってな。男子である君の意見が聞きたかったんだ」と翠が得意げに言う。

「なら最初からそう言ってくださいよ。おかげで社会的に死ぬところでしたよ」治が茜に目をやると、ぷい、と目をそらされた。

翠はすまんすまん、と手を合わせているが、絶対この人楽しんでるだろ、と治は思った。

ひとまず自分の椅子に座り、改めて問題を考える。体操着、ねえ。しばしば欲望を制御しきれない男子生徒の標的にされることがある、という話は聞いたことがある。テレビではリコーダーとセットにされて芸人がネタにしているのも、一度ならず見たことがある。もしかすると、そういう答えを期待しているのか？ いや、そんなことをここで言うわけにはいかない。なら、どうすれば……。治が必死で考える中、「で、どうなんだ」と回答をせかす翠。

緊張した空気の中、誰もが固唾を呑んで治の言葉を待っている。

茜が椅子に座り直し、ぎしりと音が鳴った。

「体操着は」と治が言った。

「体操着は？」と全員が繰り返す。

「体操着は、体操着ですかね」

空気の抜けた風船のように、部室の緊張が一気に緩んだ。吹雪がガスコンロの上に置かれたやかんを手に取り、廊下へ出て行った。茜がパソコンを立ち上げ、起動音が鳴る。綾はヘッドフォンをかぶり戦場へ舞い戻ったようだ。

確かに面白くない回答だと治も思った。だからといって、どう答えれば満足だったんだ。勝手に質問しておいて、勝手に残念がるなら残念がればいい。

治は投げやりにモニタの電源を点けた。こういときはストレスを発散するに限る。

戦場を駆け回るために装備を確認していると、「ふむ」と一言聞こえた。治は嫌な予感がして、それを聞かなかったことにする。

「興味深い記事を見つけた。治くん、ちょっと見るといい」

視界の隅に、チラチラと手招きしているのが見える。無視しろ。無視するんだ、と自分に言い聞かせる。

「なるほど、こういうことに使うわけか。男子という生き物は本当に」

「何見てるんですか！」と思わず立ち上がって叫んだ。治はしまった、という顔をしたが、時すでに遅し。翠はニヤニヤしながらこちらを手招いている。しぶしぶ近づいてみると、モニタに表示されているのはどこかの掲示板だった。全体的にピンクを強調したレイアウトのサイトで、何やらいかかわしい連想をしてしまう。

「これを読んでみる」と、一つの投稿文をクリックして翠が言った。治はそれに黙って目を通す。

「これは、僕が中学生の時に体験した話です。その頃の僕はかなりのやんちゃ坊主で、それはもう、悪戯としては先生に叱られている毎日でした。そんなある日、放課後いつまでも教室に残って友達と

馬鹿をやって遊んでいたときの事です。ふと、一つの机が目に入りました。意識したわけではないです。本当に無意識に、その机に目がいったんです。その机の横には、体操着を入れる袋がぶら下がっていました。袋の柄を見るに、どうやら女子のものらしいとわかった時には、それはもう妙な空気が漂ったものです。友達は、「どうする？」と神妙な面持ちで呟いたとき黙っています。「どうする？」と聞いたという事は、つまりどうかしたいのだという思いが友人の目からひしひしと感じられます。僕はただ静かに、「じゃんけん」と言いました。友達はグーを出し、僕はパーで勝利。「うへは僕がもらう」と友達に言い、

「変なもの読ませないでくださいよ!」

治が頬が熱くなるのに堪えかねて叫んだ。ただでさえ恥ずかしい文章なのに、読んでいる間中隣からジロジロ眺められるなんてどんな羞恥プレイだ。

「どうだった」と翠が興味津々で身を乗り出す。

「全部読んでませんよ」

「なぜだ」とオーバーなりアクションで驚いて見せた翠を無視し、治はさつさと自分の椅子へと戻った。

「なぜだ、じゃないですよ。第一、男子が盗んだって話も先輩の憶測なんでしょう? 決めつけると先輩の株が下がりますよ」

「つまらんな」

「面白がっていると女子から嫌われますよ。自分のがなくなっているからそんなに樂觀視できるんです」

忠告で少しは心を入れ替えるかと思っただが、翠はあくまでも毅然とした態度をしている。もういいです、と治が言いかけると、翠は不満げに言い放った。

「私のもなくなっただぞ」

「え、何がですか」

出鼻をくじかれ、驚いた態で治は聞き返した。

「だから、私の体操着も盗まれた」

ガタツと吹雪が立ち上がった。茜がボールペンを手に取ったが、どう見ても字を書く持ち方じゃない。綾にいたっては「殺す」と直に言っている。治も黙っちゃいない。怒りをあらわにして舌打ちすると、犯人を捜し出すべくドアに手をかけた、瞬間。

「待て待て！ 早合点するな、まだ盗まれたと決まったわけじゃない！」と、先ほど自分が言われた事を繰り返す翠。

「でも、なくなっただんでしょ」

「うん」

ドアを開ける。

「だから待て！」

翠が全員を説得するのに三十分かかった。なんとか落ち着きを取り戻し、席へ戻る四人。未だ腕を組み、鬼の首をねじ切りに飛び出さんとしているのを除けばいつも通りだ。息を切らし、肩を上下させる翠。呼吸を整えると、諭すように言った。

「この件は生徒会で片付けるから、お前たちは手を出すな」

「でも……」と茜が不満げな声を出す、言葉がつかえそこから先がなかなか出ない。

「お前たちは手を出すな」

今度はより強い口調で言い切り、翠はこの騒動に終止符を打った。窓から見える空にはつつすらと月が浮かんでいる。誰かが反論する暇もなく、翠は解散を宣言した。

帰り道、駐輪場で吹雪の姿を見かけ、治は足を止めた。離れた位置からも感じ取れるほど、吹雪は陰鬱なオーラを纏っている。治が声をかけるのを躊躇っていると、向こうがこちらの姿に気づいた。こうなっては仕方がないので、治は意を決して吹雪の元に駆け寄る。しかし、一言も発さないまま、二人は校門を後にした。

無言の中、自転車を押して歩く。すれ違う人々が、怪訝な顔をしてこちらを見る。他の人から見たら、喧嘩中の恋人同士にでも見え

るのだろうか。

先に沈黙を破ったのは、吹雪だった。

「知らなかったわ」悔しそうに吹雪が言う。「翠のも盗まれてたなんて」

思い詰めた語調に、喉元まで出かかっていたジョークを、治はぎりぎり飲み込む。実際に治も、言いようのない怒りを感じている分、彼女の気持ちはよくわかる。しかし、

「僕たち射撃部にはどうすることもできませんよ。でも、吹雪先輩は生徒会じゃないですか。少なくともあなたは、翠先輩のために」「それが悔しいの」

それは強く、心からの叫びのように聞こえた。

吹雪は立ち止まり、かすかに肩を震わせている。伏せられた表情からこぼれ落ちた涙が、アスファルトを濡らす。

治は言葉を失い、立ち尽くしていた。自分にはどうすることもできない、という虚無感に反抗するように、拳を固く握りしめる。覚悟を決めた。治は握りしめた拳をゆっくりとほどくと、それを吹雪の肩に乗せた。肩の温かさが手から伝わってくる。

不意に、体重の移動を感じた。吹雪の肩が、一瞬で数センチ下方に動いたのだ。おろろろは踏み込むために。でも、何に？ 治は考える間もなく、後頭部を壁に叩きつけられていた。

がっしりと顎を掴まれているのと、後頭部の激痛とで上手く喋ることができない。遠慮なく涙を垂れ流している眼球に、ぐい、と顔が近づけられた。

「協力して」少し赤がかった目には意志の強さが感じられる。吹雪はそのままの体勢で続ける。「犯人捜しは水面下で行う。情報収集には警備会社を雇うわ。あなたは他の部員に伝えて、「犯人は絶対に潰す」とね」

なぜ頭を壁に叩きつけたのかはわからないが、暴力的なまでの公言に、治はただ黙って頷くしかできなかった。それから数秒治は睨まれ続け、ようやく解放された。治は自由になった顎をさすりなが

ら、憤然と去つて行く背中を呼び止めた。無論、身に覚えのない暴行の理由を知るために。

「だって、あのままキスする気だったでしょ」吹雪は魔女的な笑みを浮かべながら言い放った。未だズキズキと痛む頭には、少々きつすぎる一言だ。それに「濡れ衣ですよ」と返せないあたり、治は赤面することしかできなかった。

六 発目

理由のない暴力に苛まれた次の日、治はひとり、射撃部の部室にたたずんでいた。三十分前に、「今日も生徒会の仕事で遅れる」と翠が言いに来たきり、他の人が来る気配はない。やはり、皆昨日のことが気になっっているのだろうか。吹雪に頼まれた伝達役も、部員が来なければ果たしようがない。

窓の外は、今朝からの雨がまだ続いているようだった。分厚い雲が空を覆い、降り注ぐ雨粒が刻々と気温を下けている。特にひとりであるときの雨は、余計に寒く感じる。治はできるだけ身を小さくして腕を組んだ。こうしていると、心なしか温かい。かすかに聞こえる自分の鼓動の音も、安眠を誘う音楽のようにリズムを刻んでいる。このまま寝てしまおうか、と目を瞑る。雨の音もいい子守歌になっている。ふわふわと足が浮く感覚、悪くない、どうせ鍵はポケットだし、下校時刻を過ぎたとしても見回りの先生が気づくだろう。夢の中で、治は中学校にいた。それは中学時代、三年間を帰宅部として過ごした忘れたい記憶だった。かつての友達は何笑っていた。遠くで、笑っていた。まだ夕方になりきれない平日の午後、とぼとぼと歩いた帰り道。全てが鮮明な映像だったが、治の姿だけが、映っていないかった。

どのくらい寝ていたのだろうか。無理な体勢をしていたからか、首の裏がギシギシと痛んでいる。眠っていたときよりも部屋が暖かい気がする。治はぼんやりしながら目を開けた。

ガスコンロの上に置かれたやかんから、湯気が噴き出している。部屋が暖かいのはきつとこのせいだろう。パタパタと駆け寄った茜が、コンロの火を止めた。茜、いつのまに來ていたのだろうか。窓の外を見ると、雨はまだ止んでいないようだった。

「あ、起きた？ 起こしちゃ悪いと思っただけけど、お茶、飲む？」
茜が申し訳なさそうな顔をしている。治がうなずくと、茜は三つの

カップにお湯を注いだ。それを見て、綾が離れた位置に椅子を置いて、本を読んでいるのに気づいた。今日は戦場に行くのはお休みらしい。

「生徒会コンビは？」

「知らないわよ。あんたが一番最初に来たんでしょ」と茜が警句を吐く。

そういえばそうだった、と治は思い出す。完全に覚醒しきらない治の前に、茜が乱雑にカップを置いた。

「翠先輩は今日も生徒会らしいです。四時頃言いに来ました」

「へえ」と相づちを打ちながら、茜は時計に目をやる。五時十五分。治が眠っていた時間は、四十分強といったところか。目をこすりながら、治は吹雪の件をどう伝えようか考えていた。そして完全に目が覚める頃、治は腹を決めて口を開いた。

「話があります」

「ねえ」悟ったような、また、誘っているようにも見える表情で茜が割り込んだ。「中学生の頃、どうやって登下校してた？」

今までに見たことのない、暗澹とした瞳だった。

「徒歩ですよ」

「ひとりで？」

「ひとりです」治は正直に答えた。

「そっか」と茜が両腕を前方に伸ばす。そしてそのまま治の目の前にもっていき、グーの親指だけを立てた。「元気だせよ！ 少年！」しばらくあっけにとられていた治だったが、やがて何かに気づいたかのように目を見開いた。

「もしかして僕、何か寝言を言っていました？」

「バッチリ」語尾に星マークがつきそうなアクセントで、茜がウインクをした。治はそれに、真っ赤な顔で反論する。

「僕なんて言っていました！？ 僕が何と行ってようと、それは寝言であって僕自身の意見ではなくてですね！」

「教えな―い」と頭の後ろで腕を組み、椅子の背にもたれかかる茜

「でも」天井を見つめ、また、あの目だ。「私は好きよ、そういうの」

「はあ、ありがとうございます」と治は形式的に礼を返す。

「なんて言ったか覚えてないんでしょ」

「はい」

くすくすと笑う茜を見て、治も無意識に頬を緩ませる。そうしている、さっきまで悩んでいたのが嘘だったかのように自然と口が動く。

「昨日の帰りに、吹雪先輩と話しました」

治の真剣な声を聞いて、茜は耳を傾ける。綾も自分の椅子へと戻ると、読んでいた本を机に置いた。

「犯人捜しは水面下で行うと、情報収集に警備会社を雇うと言っていました。それと、「犯人は必ず潰す」とも」

「何よそれ」と茜が不機嫌そうに机を叩いた。「私たちには手を出さなってこと?」

「わかりません。僕が聞いたのはそれだけで、今日の部活で確認できると思っただけですけど……」

あいにく、吹雪の姿はない。

「私が行って確かめてくる」茜はそう言うと、颯爽と席を立った。

「待つてください、行くつてどこに行く気ですか」

「生徒会室よ! どうせ会議だつてそこでしてるに決まってるわ」

茜がドアに手をかける前に、ドアは自動的に開いた。もちろん一端の学校に自動ドアがあるはずがない。ドアを開けた主は、いつもの調子で飄然と突っ立っていた。

「どこか行くのか?」

「いえ、もう用は済みました」と茜は仏頂面で席へ戻る。

翠の後ろには誰もいない。

「おかしな奴だ」と呟いて、翠はドアを閉めた。治はその背中に向け、茜の疑問を代弁する。

「吹雪先輩はいないんですか?」

「あいつは休みだ」と翠が振り向く。「あいつが休むなんてめずらしいんだけどな。オフラインイベントと登校日がかぶってる場合は確実にサボる奴だが」

そう言うのと、翠は自らの椅子にどさりと腰かけた。治、綾、茜は顔を見合わせる。昨日のこともあるので、とりあえずは当人には知らせないでおこう、と視線で合図を送り合う。こういう心理の読みはFPSで嫌というほど鍛えられたので、造作もなくできる。

「翠先輩って、中学生のときどうやって登下校しました？」と治がフラインプレーで話をそらす。

「登下校か」と翠は顎に手を当てて考え込む。

治は、なにかまずいことを言ってしまったかと気が気ではなく、茜に助け船を求めて視線を送る。しかし、茜は肩をすぼめるだけで半分沈んだ船に飛び乗るような愚考はしない。

「毎日吹雪に送ってもらってたな。あいつ、親が車で送迎してたから」

「さすが吹雪先輩ですね、感服の至りでございます」

太ももをぎりぎりつつねられて、若干日本語から逸脱しつつも治はなんとか返答した。横目で隣を見ると、この世のものとは思えない笑顔の茜がいる。視線外では、捻切るように治の太ももに食らいついている主の顔とは到底思えない。いや、思えます。思えますから離してください痛いです。

痛いからといって声を出せば、当然翠に怪しまれてしまう。ひきつった笑顔で脂汗を流すいまも十分怪しいが、それでも、治は必死に取り繕って茜と目を合わせた。

(自業自得よ。苦しんで死ぬがいいわ)

(勘弁してくださいよ！ 死にます、痛いですが、お願い助けて！) 茜の指が太ももから離れると同時に、治は悶絶しながら足をさすった。翠が椅子を反転させたので、隠す必要がなかったからだ。

窓の外を、見ているようだった。

雨の日は、誰でも気分が落ち込むものなのだろうか。この人に、

落ち込むなんて感情があるのだろうか。椅子の背で隠れた翠の表情を、治は見る事ができない。想像での顔は、無表情だった。

「雨は好きか」と翠が言った。

「嫌い」と茜が即答する。

嫌いではないが、好きかと聞かれたら違う気がする。雨に特別な思い入れはない。しかし、傘は好きだと治は思った。傘をさしているときは、人と目線を合わせなくてすむ。うつむいて歩いているも、自然に見える。だから、治は傘が好きだった。

「治くんは」と翠が再度問う。

「僕は、」迷った挙げ句、治は思っていることを答えた。「僕は傘が好きですね」

ぷつ、と噴き出す音のあとに、豪快な笑い声。翠が椅子を反転させ、目元に浮かぶ涙を拭いながら言った。

「なんだそれは。私は『雨が好きか』と聞いたんだぞ」

苦笑混じりだったが、その顔は心底楽しそうだった。治はその顔を見て、椅子の背に見た無表情はただの杞憂だったのだと安心した。翠は、いつも通りの翠だ。そして、それはこれからも変わらない。明日になればまた全員揃って、馬鹿話にゲームをすることができる。茜に罵倒され、綾に笑われ、翠に慰められ、そしてまた吹雪に怒られる。

少なくとも次の日までは、治はそう思えることができた。

次の日も、吹雪は学校を休んだ。

心配そうに窓の外を見る翠の目元には、隈が見受けられる。先ほど綾が心配して声をかけたが、ぶっきらぼうな返事をしただけで会話が終わってしまった。翠にしてはめずらしいことだ。悲しげに肩を落として座っている綾を見ると、少々胸が痛む。勇気を出して話しかけ、それに愛想のない返事をされることの痛みを、治はよく知っている。

昨日からの雨は、まだ続いていた。

「部長、よく眠れてないんでしょう。少し休んだほうがいいです」と茜が毛布を手渡す。

翠は「悪いな」と呟いて、それを肩に掛ける。椅子の背の角度を調整し、静かに目を瞑った。

正直、こんな翠の姿は見たくないが、問題の吹雪が来ないことにはどうしようもない。治は今後の対処を議論すべく、パソコンの電源を入れる。念には念を入れて、話し合いはチャットで、という綾の提案だ。

今の翠には、負担をあまりかけたくない。どうやら生徒会のメンバーは、五月に入ってからすぐにある生徒総会の資料作りに忙しいのだと、帰りのホームルームで教師が言っていた。無論、生徒会長である彼女にもそれなりの量の仕事があり、吹雪がいない今となっては人一倍働いているに違いない。

『部長、昨日も夜遅くまで学校に残っていたらしいわよ』と茜。

『朝早く図書室で見かけた』と綾も情報を提供する。

『少しでも負担が減るように、私たちも手伝えないかしら』

『ゲームできなくてもいいから、翠を手伝えたい』

各々が自分には何ができるかと考えている。みんな部長が心配なのだ。それなのに、

『吹雪先輩はこんなときに何やってるんだ』

誰が携帯に電話をしてもでない。メールも返信がない。あの吹雪が、ゲームにすらログインしてこない。そのうえ生徒会の仕事すらしないとは、吹雪は何を意図して行動しているのだろうか。

刻々と時間だけが過ぎていき、結局、何も進展のないまま下校時刻となってしまう。ギリギリまで策を練っていた治たちは、椅子に腰かけ眠り続けている翠の姿を見た。何か夢を見ているのか、眉間に皺を寄せながら寝息を立てている。この時間まで学校に残っていたのは、眠っている彼女を起こしたくないという思いも含まれている。きつと翠は、今夜も一人で仕事をするのだろうか。

茜が肩を叩くと、翠はすぐに目を覚ました。だいいち、寝心地の

悪い椅子の上では熟睡できるはずもない。あくびをしながら、「もうこんな時間か」と時計を見て言った。目の隈はだいぶましになったが、それでも色白の肌に黒は目立つ。

「翠先輩、大変なら僕たちも生徒会の仕事手伝いますよ」

「だいじょうぶ、これは生徒会の仕事だ。私も元氣だし。ほら」

いつちに、いつちに、と体操をして見せる翠。意図的に見せようとする感がひしひしと伝わってくるが、それを邪魔するのは、あまりにも無礼といえよう。

帰り際に、「部長、温かいお茶を水筒に入れときましたから」と茜が水筒を渡す。

綾も「体に気をつけて」とねぎらいの言葉をかけた。

治にできたのは、昇降口まで見送りに来た翠が、別れの言葉を言うてすぐに走り去っていった背中を目で追うことだけだった。

変化は唐突に訪れた。

ついに日付が五月へと変わったその日、今日も治たちは部室に集まり今後の方針を考えていた。吹雪が学校を休んでからもう三日になる。ここはいつそ翠も同伴で、吹雪の家に行ってみようか、と治が提案したときのことだった。

力なく開いたドアの向こうに、翠が立っていた。ふらふらと室内を進み、崩れるようにして椅子に座る。何かあったのだろうか、と固唾を呑む三人。

「そうだ、お茶入れますね」と茜が取り繕うようにして席を立つ。これもこの数日間で見慣れた光景だ。

治も何気なく携帯を開き、吹雪にメールを送信する。送らないよりはマシだと思いつけているが、今のところ収穫はない。

違和感に気づいたのは、綾だけだった。チャットを受信したのに気づき、治は文面に目を通す。内容は「翠の様子がおかしい」という要領を得ないものだった。もう少し情報量を増やしてくれよと内心毒づきながら、治はキーボードに指を走らせる。

『何がおかしいの?』という内容を送信したあと、治は文面を見つめながら考えた。『何がおかしいの?』おかしいことだらけじゃないか。吹雪は失踪。翠は疲労困憊。一週間前は予想もしなかった出来事ばかりじゃないか。

治は募る苛立ちのせいで、しばらくの間綾の打ち返した返信に気がつかなかった。

『全然喋らない』

あ。本当だ、と思う前に、治はそれを見た。

翠が机に頭垂れて、うなされるように荒い呼吸をしている。顔はインフルエンザを思わせるほど朱色に染まっている。

「先輩!? 大丈夫ですか!」

治の叫びに何事かと茜も気づき、近くに寄ってくる。

「部長! しつかりしてください!」と慌てて茜が駆け寄り、翠の額に手を当てる。「これ、相当あるわね。治、職員室に行つて連絡してきて、至急お願い」

治が職員に伝えると、すぐに保健室に連れて行けという指令が下った。親の迎えを呼ぶので、それを待つ間の僅かな時間でもあたたかい布団で寝ていたほうが良いという教師の計らいだろう。もつとも、最大限に責任を減らすためのマニュアル行動なのかもしれないが。しかし、そんなことは治にはどうでもよかった。走つて部室に戻ると、茜に言われたことを伝え、治は迷わずに翠をおぶった。

「ちよ、何してんのあんた」と動揺している茜を無視し、保健室に向け歩き出す。治の真剣な表情に気圧されたのか、茜もそれ以上は言わなかった。

「綾、僕は手使えないからかわりにドア開けてくれる。それと石原先輩は、先に保健室に行つて準備を頼みます」

二人は頷いて、それぞれ任された仕事につく。綾がドアを開け、治が廊下に出ると、まだ学校に残っていた少量の生徒から奇異の視線が向けられた。ある女子は悲鳴にも聞こえる声を漏らし、ある男子は頭を抱え羨望と絶望の中間の顔をしている。学校中の誰もが知

る生徒会長を、どこの馬の骨ともわからない一年坊主がおぶっているのだから無理もない。治は生暖かい視線を振り払い、ひたすらに保健室を目指す。明日にはあらぬ噂が蔓延しているだろうという悪い予想は、なるべく考えないようにした。

保健室に着き、ベッドに寝かせると、苦痛の表情がいくらか和らいだように見えた。綾と茜はベッドの横に置かれた椅子に並んで座り、翠の手を握っている。治はその反対側で、立ったまま呆然と眺めていた。目の前の光景が、まだ、信じられない。といった様子で、今にも泣きそうな顔をしている。

翠のまぶたが、うつすらと開かれた。手を握っている茜と綾をゆつくりと見たあと、最後に治の姿に目を移した。

「ありがとう。治くんが、運んでくれたんだろう？」

「そうですよ。翠先輩、意外と重いんですね、大変でしたよ」

「ハハ、恥ずかしいな」と目を細める翠。

本当は、華奢すぎるくらいに軽かった。軽くて、あたたかくて、いい匂いがした。心にもないことを言ったのは、治の精一杯の強がりだった。目をこすり、それが流れ落ちないように阻止をする。

「部長、今度からは私たちも、生徒会の仕事手伝いますから！もうなんて言っても聞きませんよ」と茜が涙混じりに言った。綾も心配そうな表情で、翠の額の汗を拭き取る。

しかし、翠は迎えが来るまで目を開けることはなかった。

「あんだ、いい顔してたわよ」帰り道、茜がぼつりと言った。

「かつこよかった」と綾も続いて言う。

「ありがとうございます」と治は短く礼を言ったが、気まずい空気は変わらない。皆、疲れていたのだ。

結局、それから一言も喋らないまま、それぞれが帰途についた。

治はただ、熱い風呂に入って、何も考えずに眠りたかった。

七発目

次の日、治は半日を死んだように過ごした。黒板に文字を書く教師も、それを写す生徒も、校庭の横を走るごみ収集の車さえ、治には憎らしく見えた。どうしてこんなことになってしまったのか、悩んでも悩んでも答えは出ない。

治はこの日初めて、二年生の教室がある階へと足を踏み入れた。治たち一年生のクラスは全て一階にあり、特別教室も別棟に集中しているため、特に用事のある者以外は基本階段を使うことはない。だからこそ治は二階の廊下を歩く際、かなり浮いていた。元来昼休みのというのは廊下や教室内が人でごったがえしているものだ。しかも、治は元々がそれほど活発な外見ではない。そんな冴えない顔をした一年が、二年生の教室に足を踏み入れ、女子の名前を呼んだとあらば目立たないわけがない。

「ああ、石原さんなら隣のクラスよ。君、勧誘祭のとき茶道部の出店に来た人だね？ 今からでも遅くないからぜひ茶道部に……って、ちよつと、逃げないでー！」

どこかで見たことのある眼鏡だと思い話しかけたのが運の尽き。まさか例の茶道部とこんなところで再開するなど夢にも思わなかった。しかし、今の治には、二年の教室にひとりだけ迷い込むようにして入ってきた一年に向けられる、好奇の視線のほうが致命傷だった。ただでさえクラスを間違えて心臓が爆発しそうなのに、これ以上茶道部に足止めをくらったら本当に死にかねない。

そうして逃げ込むように入った隣のクラスでは、さらに浮いてしまふことになった。

「一年じゃん。何の用？」と、人と話すのが唯一の生き甲斐ですと全身で表現しているかのような坊主が、こちらに気づくやいなや昂然と近づいてきた。治にとって他人でも、向こうは前世で杯を共にした戦友とも思っているに違いない。ここで話しかけられては、

面倒事に発展すること請け合いだ。

「すみません、石原先輩いますか？ 部活のことで話があるんですけど」

急いで適当な位置にいた女子に尋ねると、幸運なことにそれを見た坊主は自らの群衆の中へ戻ってくれた。治はホッと胸をなで下ろす。

「石原さんならあそこよ。ほら、窓のそこ」

女生徒に言われた方向を見ると、確かに茜の姿があった。しかし、周りを寄せ付けられないように一人机に突っ伏しており、進入不可区域のような不自然な空間を纏っている。

「今日は朝からずつとあの調子なの。君、石原さんの彼氏？ 慰めてあげてよ」と無責任なことを言ってキャツキャと喜んでいる女生徒に一応の礼をし、治は茜の元へと歩を進めた。

目の前に立つてみたが、顔を伏せているので一向に気づく様子がない。仕方がないので開いていた椅子を失敬し、それに腰を落ち着ける。椅子の持ち主の姿は近くにないが、咎められたときに謝ればいいだろう。このままじつとしていても意味がないので、治は頭の右側で髪がまとめられている後頭部を小突いてみる。

「石原先輩、起きてください」

茜は睡眠 あるいは考え事 を邪魔され、くぐもった声を上げた。興味本位で話しかけた同級生ならばこれで身を引くところだが、あいにく治にも用事というものがある。治は先ほどよりも強く頭を小突いて、再び起床を促す。

「だれよ」ようやく喋ったのはめまぐるしい進歩だ。声だけでは気づいてもらえなかったというショックはあとで受けることにして、治はできるだけひょうきんな声で名乗った。治にとっても今の茜の状況は、痛いほどよくわかる。だからこそ今は、少なからず笑いが必要だ。

「《人間失格》でございます」

「なんだ、治じゃない」とやっとなが顔を上げた。いつからそうし

ていたのか、顔には制服の皺のあとがくつきり残っている。

「石原先輩がこの名前つけたんですから、少しは使ってくださいよ」

「あなた、《人間失格》って呼ばれたいの」

「先輩がそう呼ぶなら、やぶさかではありません」

不機嫌そうな表情から、笑い声が漏れた。そしてだんだんと表情が和らいでいく。治はそれを見て安心した。茜がこうなっていることは、おおよそ予想できていた。実際に治自身も、朝から昼休みに入るまでは茜と同じ心境だったのだ。問題は、どう立ち直るか。

治は三時限目が終わった休み時間に、綾が教室に来たことを思い出した。いつもよりいくらか慌てた様子で、教室の入り口付近で部屋の中を見回していた綾。治の顔を発見すると、安堵したように駆け寄ってきた。

「治、だいじょうぶ？ 朝、私も先生から聞いた。翠のこと。それで、治落ち込んでないかと思って」と綾が心配そうな顔をしていた。治は、これほどまでに感情をあらわにしている綾を見るのは初めてだった。

「大丈夫、じゃないかも」

治は綾の顔を見ると、余計に感情が高ぶるのを感じた。長すぎる前髪を握りしめ、自分の不甲斐なさを呪う。

「治、笑って」困ったように震えた声だった。綾はそのまま、机の上に置かれていた治の手を握る。「いつもみたいに、冗談言つてよ」クラスメイトが遠巻きに茶化している声が、次第に聞こえなくなった。目の前で女の子が泣いているんだ。何してる。何してるんだよ。立てよ！

気がつくとき治は、綾の手を握って走り出していた。このまま校外に出てしまおうかと思ったが、それはさすがに目立ちすぎる。保健室、開いている選択教室、と順々に回り、消去法でたどり着いたのは屋上だった。通常ならば頑丈に施錠されているはずのドアが、鍵の故障で開いていることを治は知っていた。我らが生徒会長が、以前に修理予算についてばやいていたのを思い出したのだ。

錆び付いた鉄の匂いがするドアを押し開ける。そこには、昨日までの雨が嘘だったかのような晴天が広がっていた。

ドアが開かれてもすぐには見つからなさそうなパイプの陰を見つけ、二人で腰を下ろす。四時限目は、サボろうと思った。綾にそれを伝えると、彼女も黙って頷いた。

まだ少し冷たい五月の風が、なでるように頬に当たった。湿った草のおいがする。隣を見ると、綾も気持ちよさそうに目を細めていた。

「寒くない？」と治が言った。

「うん、へいき」

短い会話だった。それでも治は、十分に元気づけられた。おそらく綾だってシヨックを受けたはずだ。今、こうして自分を心配してくれる人がいることが、とてつもなく嬉しかった。乾いた砂に水が染みこむように、ゆっくりと胸が温かくなる。

「その、ありがとう。綾だってきつかっただろうに」

「いいの。それよりも」綾は躊躇うように間をあげたあと、静かに言った。「治は茜のところに行つてあげて。きっと、そのほうがいいから」

元來会話があまり得意じゃない綾が、別のクラスまで出向いてここまでしてくれたんだ。これ以上の仕事を綾に任せるのは、男として最低な気がする。それに、綾を二年生のクラスに向かわせるのは、さすがに荷が重いだらう。以上の理由を踏まえ、治は快く頼みを承諾したのだが。

現在にいたるまでの経緯を途中までは黙って聞いていた茜だったが、話が後半に差し掛かると、顔を真っ赤にして喋っている治の口をふさいだ。それだけでは飽き足らずに、追撃とばかりに困惑している治のみぞおちに鉄拳が突き刺さる。

「石原先輩、元氣じゃないですか……」

激痛と呼吸困難で悶絶しながらも、治はなんとか声を絞り出した。「あんたが変なこと言うからでしょ！」とそっぽを向く茜。この様

子では、もう完全に立ち直ったように見える。

五分ほど黙ったまま、二人は窓の外を眺めていた。意図的に考えないようにしているとはいえ、やはりシヨックは大きい。そんな二人の姿を見て、茜のクラスメイトたちが銘々にこちらを見て何かを言っている。学年は違えども、考えることはどこも同じらしい。

茜も外野を気にすることなく平然としていたが、やがて物悲しうに呟いた。

「入院、かあ……」

入院。治が教師から言われたのも、この二文字だった。

「朝になつても依然高熱が続いていて、病院で診てもらつても原因不明。やむを得ず入院になつたらしい。落ち着いたらお前らにも連絡するから」という教師が言った一語一句を今でも思い出せる。そして、そのあと嬉々として付け加えたこの言葉もだ。「それと、なんて名前だっけ、ああ、射撃部ね。射撃部は今日から活動停止だから。よろしく」

歴代の生徒会長の中でも群を抜いて優秀だった翠は、数々のイベントを企画したり、生徒の要望を反映して校則を緩めるなど、生徒から絶大な人気を誇っていた。それと同時に、教師からは目の上のこぶに思われているらしいことも、治はあとから知った。出る杭は打たれる。翠がいなくなつた今、射撃部は格好の標的となつたのだろう。元が強引に設立された、部員も少ない弱小部だ。教師が潰すには、さぞ簡単だつたらう。

「これからどうしましょう」と治が言った。どこを見るわけでもなく、中庭のベンチに座り弁当をついついている集団を冷視する。

二人の携帯が同時に振動を始めたのは、そのときだった。

『オフラインイベントのときに行った喫茶店に集合』と飾り気のないメール。送り主の名前は、夏目吹雪。

吃驚として目を合わせる二人。言いたいことは山ほどある。急いで返信画面を開き、怨嗟ともとれる文面を打ち込んでみると、再度手中の携帯が振動した。

『吹雪からメールきた』 本庄綾

慣れない携帯の操作に慣れない連続メールで、せつかく書いた怨嗟の数々が消えてしまった。治は興奮した様子で、茜の手を握った。「行きましよう、今すぐ」

是非を問うまでもなかった。途中一年の教室を経由し、綾も合流。急ぎ足で外履きに履き替えると、まだ昼食をついついている連中が多い中庭を全力で走り抜ける。何事かと大声で叫びながら近づいてきた教師を、綾が視線で一喝する。そういえばそんな特技がありましたね。

校門が自由に開け閉めできるのも、翠が校則を緩和したからだ。そのおかげで、治たちは何一つ不自由することなく校外へ出ることができた。

「あの方向ね」と茜が遠くのビルを指さした。夏目財閥本社ビル。でかでかとそびえ立つその塊は、学校を出てすぐの通りからも簡単に見つけることができた。簡単なストレッチをしながら、まるで今から戦場に赴かんとするかのよう振り返る。「遅れないでよ、《人間失格》！」

「はい！」と嬉々として返事をした治を、綾が訝しげな目つきで見ている。当人は準備万端で、ご丁寧に体育用のジャージにまで着替えている。

平日の昼間、制服姿の男女と学校指定のジャージを着た女子が堂々と街中を走り抜ける。よく警官に呼び止められなかったものだと治が安堵したのは、喫茶店の扉に手をかけた直後のことだった。

昼のピークを過ぎたばかりの店内は、空席が圧倒数を占めているものの、まだ数人の客の姿があった。その中に見知りの顔を見つけ、治が無言で歩き始めた。その横を、茜が早足で通り過ぎた。

店内に平手打ちの音が響き渡るのを、治も綾も止めることができなかった。

「今は何も言いません」と茜が苦虫を噛み潰したような表情で言った。

治も言いたいことは山ほどあったが、それを呑み込んで席につく。吹雪も動揺することなく、その場に腰を下ろした。

「それで、ここまで呼び出したってことは、何か策があるんですよね」と治が言った。

「私を誰だと思ってるの」と吹雪は頷いた。「廃部のことは前から知っていたわ。それを阻止しようと生徒会で働きかけていたのが私と翠だもの」

「だったら、なんで！」と治はムキになって声を荒げる。

「結論から言うわ」吹雪は有無を言わせぬ口調で、ただ冷然と言い放った。「体操着泥棒の正体がわかった」

「それとこの件が、どういう関係にあるんですか」と茜が釈然としない様子で尋ねた。

「射撃部を存続させる条件は、公式の大会で優秀な成績を収めるか、全生徒が認めるような功績を残すことよ。つまり、体操着泥棒を射撃部の手で摘発すれば、部活動を存続できるということ」

「吹雪、その犯人って、誰なの」と恐る恐る綾が言った。治も身を乗り出し、その名前を聞きのがさんと耳をそばだてる。

「西岡新三。一年三組担任。体育教師よ」

体育教師の西岡。治はその名前に聞き覚えがあった。いや、聞き覚えがあるなどという次元ではない。一年三組は、何を隠そう治自身が所属しているクラスだ。治の頭の中では自動的に再生された。

嬉々として射撃部の退部を告げる西岡の声が。翠の入院を伝える下品などら声が。

「殺してきます」と無意識に立ち上がった治の手を、吹雪がつかんだ。「離してください。今から殺しに行くんです」

「あなただけに殺させると思って？ 冗談でしょう、私にも殺す権利があるわ」

「あの変態、絶対にぶっ殺す」と茜も加勢する。そのあとから、

「ころす」と口角を上げながら声を漏らした綾の禍々しいオーラが、ひとまず落ち着こうという気を全員に思い起こさせた。どう考えて

もこの状況は危ない。通報されても文句は言えないうえに、実際に治たち全員には殺意があるのだから。

「ついてきて」と吹雪が席を立った。何も注文していなかったので、四人はそのまま店を出る。吹雪が足を進めたのは、通りを挟んだ向こうにある、吹雪財閥本社ビルだった。オフラインイベントでお世話になった会場やステージは当然片付けられており、かわりにビジネススーツを着込んだ大人たちが行き交っている。吹雪はその間を堂々と進んでいく。エントランスの受付に深々とお辞儀をされ、片手を上げて返す吹雪。なんとというか、とても様になる光景だった。

乗り込んだエレベーターが止まったのは、十六階。

「この階が私の家よ。さあ、こっちに来て」さりととんでもないことを言って、吹雪は大量に並ぶ扉のひとつに鍵を突っ込んだ。ごくりと唾を飲み込んだのは、きつと治だけではないだろう。この中に眠るのは、金塊か、札束か、あるいは骨董品の数々か。

予想通りといえは予想通り。想定外といえは想定外の光景が、そこには広がっていた。

啞然として立ち尽くす三人を尻目に、まるで積み木を拾い上げるかのようにその中のひとつをつかんで、吹雪は言った。

「本物じゃないわよ。でも人に向けて撃つたら犯罪レベルだから、できれば他言しないでね」

がしゃ、とマガジンを外して見せたのは、吹雪愛用のM4A1。

治も何度かこれに頭を撃ち抜かれた経験があるが、無論ゲーム内での話だ。しかし、目の前で吹雪が手にしているのは、どう見ても本物にしか見えない実銃だ。

「違法じゃないんですか？」と治が震える声を出した。実銃を向けられてビビらない人間がいるなら見てみたい。

「本物じゃないって言ってるでしょ」と呆れた様子で言った吹雪が、慣れた手つきでトリガーを引いた。瞬間撃ち出された何かが、治の右頬を掠めて後方にある木製の扉に激突した。治はその衝撃を、目で見る前に理解することができた。爆音を轟かせて跳ね返った青色

の弾が、こつりと治の足先に当たった。煙い臭い、洒落にならない臭いに治が一步退いた。

「弾はゴム製。それでも撃ち出すのに火薬を使うから、威力は相当なものよ。ちなみに至近距離で急所に食らうと死ぬわ」

平然と言つてのけた吹雪。口は笑つていたが、目がプロた。

「怖じ気づいた？ それならそれでいいわ。私は遣るから」持つていた銃を棚に戻すと、吹雪は手元の引き出しを開けた。中から取り出したのは、これにもおそらくゴム弾が装填されているであろう黒色の拳銃。それを順々に取り出していき、最終的には五丁の拳銃がガラス製のテーブルの上に並べられた。テーブルの下から上方を照らしているブルーのライトが、不気味さを一層引き立てる。そのうちの一つを手に取り、着ているベストの内側に忍ばせながら、吹雪は試すような目つきで呆然と立ち尽くしたままの四人を見た。「決行は今夜よ。それまでに決めておいて」

そう言つて部屋を出て行く吹雪の横顔を、治は目で追つた。冷淡、いや違う。ふつふつと燃えたぎる憎悪。吹雪は間違ひなく今夜、三年三組の担任である西岡新三を襲うだろう。止める？ そんな馬鹿な。

「これ、意外と軽いんですね。僕、実銃つて撃つたことないんですけど、あ、実銃じゃないか。それでも、射撃の練習とかしておいたほうがいいんですかね」

治は持ちあげた拳銃のグリップに指を這わせた。ざらざらとした表面。ゲーム内でしか扱ったことのないベレッタM92が、今、手の中でトリガーが引かれるのを今か今かと待ち構えている。

「ねえ、グロツクモデルつてないのかしら。私、どうもベレッタつて好きになれないのよね。なんか、気取つた感じがするっていうか」

この場所に、西岡新三の味方は誰一人としていなかった。当たり前といえば当たり前だが、ここまでとんとん拍子にことが進んでしまつと、治はなんだか自分たちが悪人になつたかのような錯覚を覚

えた。

「あれ、使いたい」と綾が指さしたのは、洪さ極まる九十九式狙撃銃。全体のフォルムにかかった明るすぎない茶が、まるでアンティークのような優雅さを彷彿とさせる。

お盆にコップを乗せて戻ってきた吹雪が、それを聞いてとんでもないことを口にした。

「ああ、あれはお父様から頂いた本物よ。もちろん今夜使っても構わないけれど、弾が当たったら間違いなく死ぬわね」

「つかう」と言いかけた綾の口を急いで塞ぎ、慌てて拳銃を握らせる治。

「これで我慢しろ、な」

我慢しろ、と握らせたブツも、当然人殺しの武器には変わらない。この部屋には常軌を逸した要素が多すぎる。

「計画を説明するわ」

全員が拳銃をしまったのを確認して、吹雪が懐から取り出した地図をテーブルに置いた。地図には大量に書き込みがされており、見慣れた駅の名前や、治たちの通う「南川高校」の文字も発見できた。その中で一際目立つようにグルグルと赤で囲まれている場所が、おそらく目標の自宅だろう。

「入り口は通りに面していて人目が多いわ。だからまず」とマグネツトを入り口に二つ置く。「茜と私が正面から突破する。相談があるとかなんとか言って室内に連れ込むわ」

「了解」と四人が相づちを打つ。

「裏手には治が回って頂戴。もしかしたらベランダから逃げようとするかもしれないから。そして最後に」

吹雪は綾の耳に顔を近づけた。治と茜は、何が起こったのかわからずに顔を見合わせる。

「そういうことで、よろしくね」

「了解」

どうやら彼女たちだけで解決したようで、綾が嬉しそうに目を輝

かせている。

「射撃の練習場とかないんですか。僕、銃を使うのは初めてで」と治が言った。

「あるわよ。こっち」と歩き出した吹雪についていく四人。そして同じ階の一室に足を踏み入れると、そこには。

「す、すげえ」

思わず呟いてしまうほどの広々とした空間に、個人スペースに区切られた射撃スペースと、距離ごとにわけられて配置されている人型の目標。それを見て、またも呆然と立ち尽くす四人。

「夜までには時間があるから、十分に手慣らしできるわね。弾はそこにあるから」と近くにあったカウンターを指さした。

「吹雪先輩って、本当にお嬢様だったんですね」と茜が驚きのあまり本音を漏らす。

「当然じゃない。私はちよつと野暮用があるから、ゆっくり練習する」といいわ。綾、来てちょうだい」

これまでに見たことのない優雅さを漂わせながら、吹雪は部屋から出て行った。これまでに治が見てきた吹雪といえば、マウス片手にジャンキーなことを口走ったり、キーボード片手に意味不明なことを叫んだり、ゲーム画面を尻目に下品な言葉を連呼したりと、そんな姿ばかりだ。隣でまだ立ち尽くしている茜も同じ回想をしていたらしく、震える手で治の腕をつかんだ。

「私、さっき叩いたこと、吹雪先輩に謝るわ」

「それがいいです」とか細かい声で答えた治も、今まで吹雪に対して重ねてきた失態をどう許してもらおうかと考えていたところだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4181x/>

射撃部、部員募集中。

2011年10月22日02時20分発行